
鎧神慨装 カイザリオン R e

不良品

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎧神慨装 カイザリオンRe

【Nコード】

N3853J

【作者名】

不良品

【あらすじ】

螺旋に囚われ続ける、夜剣廻。兄がいて、恋人がいる。そんな彼に襲い来る、宿命……。『鎧神慨装 カイザリオン』の後日譚にして、第二部。

第二幕・プロローグ

繰り返される、夜剣廻の物語。

「何を望むの？」

彼女は問うた。ただ銀色の世界、閉ざされた白銀の世界に立つ、青年に向かつて。少女は膝を抱えて、宙を浮いていた。

「違う、結末。違う、未来。そして・・・」

この螺旋を断ち切る。

「うん、そうだね。もう、終わらせなければ・・・」

少女はよいしょ、と言って、地に足をつける。

「楽しかったよ、あなたといれてね」

少女が言う。そしてさらに続ける。

「もう時間はないようだね。ここももう消えてしまおう。最後に、私の力で、あなたを連れて行ってあげる」

膝について、頭を垂れる、青年。

「やだなあ、もう」

照れたような少女の声。光が周囲を満たす。青年が言った。

「最後に、お名前を・・・」

「もう、忘れてしまったわ」

でもね。

「私もあなたと同じような存在。螺旋を生き、次元を超えしもの」
そして言った。

「あなたの新しい未来が、幸多からんことを・・・」

次元を超える。

物語は第二幕を迎える。

第二幕・プロローグ（後書き）

第二幕開始。前作は短すぎでしたが、今作はそれなりの長さになる、と思います。

第二幕・プロローグ

夜剣廻。17歳。家族は父と母、そして、兄の悠。幼馴染で恋人のナツキ・エリクセンとともに三上崎市、県立水瀬高校に通う高校二年生である。

家族関係は良好である。父も母も穏やかな人物である。兄は知的でミステリアスな人物だが、素晴らしい兄だ。背も高く、博識である。身長もそれなりに高い。身長が低いことがコンプレックスのメカネ少年とは、非常に似ている義理の兄。年齢は不詳。何故か父母も口を閉じてしまうから、何か事情があるのだろう。どこかで日中働いているが、やはり、それもわからない。謎の人物、兄。

今、僕の隣を歩く少女、ナツキとこうして歩いているのも、兄の協力あってのことだ。今思い出しても恥ずかしいが、お陰でこうなったのだから、不満はない。だが、あの時の兄の顔はとても面白がっている顔だった。冷静な兄のおちゃらけた面を垣間見た。

これから、授業か。と、ふと空を見上げる。

奔るノイズ。鳴り響く心臓の鼓動。

聞こえた気がした。だが、隣の彼女は赤茶の短髪を揺らし、平然と歩いていたから。

気のせいだな、と思った。僕たちは通学路を歩いて行く。

また、ノイズが走る。

煙草を吸い始めたのはいつだったか。青年、夜剣悠は物思いにふけていた。今は幸せだ。遙かに遠い過去の傷を塗り固めてくれる。しかし、その痛みが消えることはない。

螺旋の中心に存在し、運命に宿命に翻弄される、夜剣廻。それを救い、この螺旋を終わらせることこそ、彼の宿願であり、役目。そして、救えなかった彼女への贖罪なのだと、思う。この世界に来て、経験しなかった大学に行った時かなあ……。一番最初の疑問に対する答えをぼやく、青年。黒い髪が風に揺れ、煙が空に昇る。

奔るノイズの音。

「そろそろ、か……」

この世界の夜剣廻に迫る、運命の刻。

「アルクオーネ……」

答えてくる意思。どれほどの時を共に廻ってきたのだろうか。

「さあ、始めよう」

蠢く影は、日常に浸透していく。待ち受ける未来に夜剣廻は立ち向かうこととなるのは、翌日のこと。5月12日のこと。

運命の日

突如、奔る光の矢。迫る、化け物。

僕の一日は厭な夢から始まった。リアルな夢。一体何なのだろう、と思う。だが、飽くまで夢だったと思うと、僕はベッドから起き上がる。階下のリビングに行く。もう、明るくなっている外。だが、時刻はまだ、5時過ぎだ。

リビングに行くと、兄がいた。ノートパソコンをカタカタと鳴らしている。

夜、寝るのも遅い兄。一体何時間寝ているのか。それも謎。ブラックボックスの多い兄。

「起きたか、廻。おはよう」

「おはよう、兄さん」

いつもの会話。僕はそこで読みかけの本を読み始める。

ふと、兄が僕を見る。

「今日は、何日だった？」

「今日は5月の13日だけど」

どうかしたのか、と聞くと、いや、と首を振る兄。

「少し、ね・・・」

そう、と聞き流す僕。僕は気付かなかった。こちらを見る、兄の視線に。だが、飽くまで僕は気付かない。兄の瞳は遠い過去を見ていた。

朝食を終え、着替えをすると、チャイムが鳴る。玄関に走り、扉を開ける。

茶髪を揺らす、少女。若干仰ぐ形になる廻。

「おはよ、廻」

「おはよう、ナツキ」

毎朝恒例となったそれ。二人はそれを交わす。キス。短い時間。両親も、兄も見えていない。と、思いきや…。

「青春だな、廻」

いつの間にか後ろに立つ奏。驚き、跳ねあがる一組のカップル。

「今を噛み締めておけ、廻。いつ、幸せが離れるかわかったもんじやない。ナツキもね」

二人の肩を叩き、諭すように言った。カラカラと笑う兄。それは冗談に聞こえたが、わからない。今日の夜剣奏は何かおかしい。

「珍しいね、こんな時間に・・・」

いつもなら、まだ、家に居る兄。

「少しな」

真面目な顔の奏。廻は何をそんなに深刻にさせるのか、と疑問に思った。しかし、あんまりナツキを待たせるのも悪いと思い、支度をしに、二階の自室に戻って行った。

ナツキといつものように、学校の道のりを歩く。それなりに時間がかかるが、彼女たちにとってはそんなことは関係ない。

学校に着くと、同じ教室、2－3の教室に入る。席も窓側の後ろ、隣同士の場所。学級委員長である、親友の計らいだ。

「相変わらずだな、夜剣、エリクセン両名」

吉田 中臣。黒い髪の手短な眼鏡の長身の男子。廻の無二の親友にして、学級委員長、そして水瀬高校生徒会副会長。時期会長とも言われている。

「知っているか、両名。今日、新任の教師が来るらしい」

情報通の彼。冷静で成績もよく、気が利く。女子にはそれなりにモテている。实际いいヤツで、廻も親友と言ったら、彼以外に思い浮かばない。

「へえ、昨日そんな話聞いてないな」

行き成りすぎだと思う。ナツキも知らない顔だ。

「ああ、そうだった。夜剣、先生が呼んでいたぞ」
何の用かと思いつながら、職員室に行く。

「ああ、夜剣。来たか」

担任の初老の教諭。人はいいが、少しまどろっこしい喋りで定評な、教諭だ。

「クラーク先生！」

担任が見慣れぬ外国人に言った。その人物はこちらに来る。

「君が夜剣廻クンか、はじめまして、今日からここに赴任したクラーク・ベルナルです」

白い髪、黒い瞳の男。30代前半、いや、20代後半か、それぐらいの男。

「いやあ、似ているねえ、奏に」

どうやら、兄を知っているらしい。長い付き合いなのか、僕は聞くと、目を細める、男。

「そう、永い、永い付き合いさ…」

突如、奔るノイズ。耳を抑える。目の前の白髪の男は笑う。

「螺旋を超えてみせろ」

聞こえた声。目の前の男からのものか？ 目の前の男はただ、薄ら笑いを浮かべている。

僕は逃げるように、職員室を後にする。

運命は刻々と迫っていた・・・。

運命の日

クラーク・ベルナールは全校集会で挨拶をして、すぐに学校を後にする。そして、向うのは、三上崎山。

三上崎の遺跡。異なる、異空間の残照が残るそこにもう一人の人物がいる。

夜剣 奏。

「久しぶりだなあ、廻。いや、今は奏か」
馴れ馴れしく話す、ベルナール。

「この世界に何の用だ、ベルナール」

「いや、何、僕らの親が一体何を成し遂げたいのか、興味があつてね」

ウィンクする、白髪の男。

「気持ち悪いな」

奏が言う。

「それに俺はお前の、お前たちの親ではない」

「だけど、僕たちはあなたを元に生み出された。この世界に居るのはおそらく僕だけ。他のナイトブレイドはいないよ」

遺跡の奥をのぞく、ベルナール。

「今日がその日か。いや、いいときにこっちに來れたね」

「狙って來たのだろう、貴様は」

「いやいや、でもね。僕も厭なんだよね。この螺旋の繰り返しは・・・」

「そうだったな、お前も・・・」
ベルナールを見る。彼は踵を返す。

「ねえ、廻。君は・・・」

奏言つて首を振る、ベルナール。そのまま、歩き去る。

「ベルナール。お前はこう聞きたかったんだろう？ 全てが終わったら、どうするか、と・・・」

贖罪。それが彼の使命。それが果たされた時、彼は――。

ベルナールに再び昼休みに呼び出された。どうやら彼はカウンセラーらしいが何の用か、と廻は疑問に思いながらも、カウンセラー室に行く。朝まででなく昼までも私と廻の時間を・・・と、ナツキが怒っていた。後で何か奢って期限を取っておかないと、と考えながら、ドアをノックする。

「ああ、入って」

ベルナールの声。入る廻。テーブルを挟んで向かい合う形の二つの椅子。促されてそちらに座す廻。テーブルにはコーヒーカップがまだ、湯気を発している。

「来てもらったのは他でもない、君のことだ、夜剣廻。螺旋に囚われ続ける存在」

笑いを浮かべた顔。しかし、声は笑っていない。

「今日これからあること、起こる出来事から逃げるてはいけない。

それは君の宿命だ」

訳が分からないという顔の廻。

「今はわからなくていい。けどね、その時になったら、目を背けるな」

置いてあったコーヒーカップを飲むベルナール。アツ、と舌を出す。

「何かあったら、相談に乗るよ。ここを訪ねてくれ、おいしいコーヒーも出すよ」

退室する廻。見送るベルナール。

「忌々しい螺旋・・・その枷を突き破れ、夜剣廻くん・・・」

昼の陽気の中、眩くベルナール。

奔るノイズ。

運命の日

夕刻。部活のあるナツキを待たずに、帰路に着く廻。その脳裏にあるのはベルナルの言葉。

あれは何なのか。疑問は尽きない。

深夜。その日は両親は仕事でいなかった。兄も、帰宅していない。早くに寝ていた、廻。そんな彼は、パチリと目を開く。眠れない。何か起きる、そんな予感。

そして、揺れる世界。次元をも揺るがす、微かな、だが、地球全体を揺らす、地震。

起きて着替えて、外に出る。そして見えたのは。

時空の歪み。

空より現れる、形容しがたき化け物。とっさに察知する。あれは危険だ、と。

轟音が周囲を包む。消滅する、三上崎山。光の柱が立ち、闇夜を照らす。

化け物はふと、こちらを見たかのように感じられた。そして、廻のいる方向に、光の矢が放たれた。

それを遮る、時空の歪み。そして現れる、もう一つの魔人。

鎧神慨装。

廻は驚愕の表情でそれを見る。それは、巨大な体躯をかがめ、廻を見た。そして、言った。

『螺旋の主よ、約束の刻だ。今こそ、汝の宿命を断ち切ろう』
光る瞳。黒い悪魔のようなそれは続けた。

『我が名は鎧神慨装カイザリオン。主の刃として、螺旋をも斬り裂こう』

手を出し、廻を乗せる、それ。抗えぬ廻。ふと、巨人の胸の、何か
が光る。その瞬間。

廻は謎の空間にいた。そこが、鎧神慨装と言うものの中だと何故
か判った。

その空間から、化け物が見えた。

訳が分からない。だが、やらなければならないのだ。

そう思うと、その思いに共感したように唸る、巨人。

「お前が何かは知らないけど、あいつは倒さなきゃな」

何か武器はないか、どう動かすのか。疑問ばかりだが、直感に任せ
て手足を動かすと、そのとおりに、カイザリオンが動き出す。

行ける！

『カイゼルブレード、機動』

両腕より、銃口のようなものが伸び、そこからビーム状の剣が生成
される。それが武器であるのは明白だ。近づいて行った化け物に向
けて、廻は手を振り下ろす。化け物の装甲を破る、剣。チューブの
ようなものを切り裂き緑色の液体が夜空を染める。躊躇なく、再び
剣を振るう。腕のようなものを斬り飛ばす。響き渡る、絶叫。

「これで、トドメだ！！」

両腕を振り下ろすカイザリオン。それを貫く、一本の槍状の何か。
後ろを振り向くと、目の前に居た敵と同じ奴がもう一体立っている。

「な、くう！」

刺された部分が痛む。フィードバックするのか、と理解する。痛み
で、思考が揺らぐ。早く決着をつける！そう思った廻に告げる声。

『ギャザッシュカノン、チャージ完了』

エネルギーが拳に集まる。カイザリオンを飛躍させる。上空高くに飛んだカイザリオンは、両の手を合わせそれを放つ。二体の怪物は、その高エネルギーによって消滅する。

「いったい・・・何なんだよ・・・っ!!」

気づくと、家の自室に居た廻。訳も分からずに、だが、夢などでは無いと理解していた。

ドアの向こうにいた夜剣奏。その後ろに立つベルナール。

「これからが本当の試練、だな」

ベルナールが言った。

「ここはもう、俺の知る世界とはシナリオの根底が違う。我々の存在が吉となるか、凶となるか・・・」

いずれにせよ、賽は投げられた。望むと望まぬとも、運命は動き出す。

月明かりの下に照らされる、一つの影・・・。

変わる日常

劇的に何かが変わったわけではない。あれほどの騒ぎがあったのに、僕の日常は何も変わらなかった。何かの力が、あの怪物の存在の記憶、痕跡を消しているのか、とも思う。僕の前に出てきたあの存在。疑問に思う僕。そして、ふと思い出すのはベルナルの顔。あいつなら、何か知っているかもしれない。通学路を歩きながら廻は考えていた。お陰でナツキの話を聞いておらず、彼女の怒りを呼び覚ますこととなった。

「いいんだいいんだ。廻は私のこと、きらいなんだ」

どこの子供かと思う。全く、彼女は僕相手だとしてこう甘えるのか。だが、惚れた弱みで、僕もついつい甘やかす。この日常が変わっていないことに安堵する。そうだ。この日常を守るんだ。ナツキを不幸に合わせてはいけない。

そんな決意の朝。

放課後、カウンセラー室に向かう廻。友人の中臣に茶を勧められたが断った。彼のお茶は本格的すぎる。凝り性な彼にそんなことを言っても無駄だが。くだらないことを考えていると部屋はもう、目の前だった。ノックするのを迷っていると、中から声がした。

「廻くん、早く入っておいで」

ベルナルの声。まるで僕が来るのを予測していたようだ。扉を開けて中に入る。テーブルの上にはまだ湯気の出ている二つのコーヒー。深く椅子に座すベルナル。その顔には笑みがある。

「そろそろ、来ると思っていてね。さ、座ってくれ」

取り敢えず座る廻。身を乗り出すベルナル。

「それで、何を聞きたいのかな？」

「全てを」

「それは無理だね。答えは自分で見つけるものだ。でも、少しだけなら教えてあげようか」

「まず、この世界は幾つもある次元世界の一つ。次元世界は無限にあり、一つ一つが似た、だが、どこかが違う世界なんだ。例えば、ここに似た世界があるとする。文化も習慣も、なんら変わらない。でも、僕がいらないとする。これだけでそれは違う世界なんだ。可能性の世界。これは幾つもある」

「つまり、他の世界にも僕がいるし、いない世界もあるということですか」

「そういうことだね。そんな世界を自由に渡り歩くものを『超越者』という。君の見た怪物もそれさ。でも、彼らはあるもの、それが何かはわからないけど、それを使ってこの世界に来た。次元を破壊しようとする未知の機械。僕もその詳細を知らないがね」

「しかし、彼らの侵攻は止めなければならない。この世界を壊されたくなければ」

「どのようにして？」

「それが君の乗ったであろう存在、さ」

「どうして、そんなことを先生が知っているのです？」

「さあねえ」

とぼけるベルナル。

「ま、それは置いといて。君の乗ったあれは鎧神慨装、って言うてね。何の制約もなしに単独で次元を超えられるシロモノ・・・まあ、反則技なのさ。あれは人を選ぶ機械でね、意思を持っているんだ。そして、君は選ばれたのさ、その魔人にね」

「それはどこにいるんですか・・・？」

「どこかの次元じゃないかな。あれはそういうのだ。今日みんな何

事もないかのように過ごしているだろう？あれは世界の修正力さ。
大いなる意思のもとで行われているんだってさ。そして、その鎧神
慨装もその意思が作りだした救世の器」

「・・・・・・」

「名前はカイザリオン。次元世界を司る、皇帝さ」

扉を開け、退室する廻にまたおいで、とにこやかに笑うベルナ
ー。謎は深まるばかりだった。

戦闘指南

突然、奔るノイズに起こされる廻。気が付くと、あのカイザリオンに乗っている状態だった。ベッドで寝間着姿でいたはずが、ちゃんとした服を着ている。

「お前の仕業か？」

カイザリオンに問う廻。肯定の意を返すカイザリオンに、ため息をつく。

「協力はするからさ、事情を話せよ事情を」

『敵が来る。主の力がいる』

それだけか、と思うが、それがこいつなりの想いやりなのだろう。そもそもこいつは機械なのだと、ベルナルルの会話より思い出す。

見渡す世界は何もない、荒廃した台地であった。そこに現れる次元の揺らぎ。揺らぐ世界に現れたのは昨日の敵だ。しかも今度は8体。

「勝てる気がしない……」

昨日も2体だったがてこずった。これもヤバいのではないか、廻の本能が告げる。

「いけないなあ、弱腰じゃあ」

聞き覚えのある、声。それはベルナルルの声だった。ベルナルルは奴らの後ろより現れた。そのベルナルルは灰色の巨人の掌に乗っている。巨大な碇を背負う、一つ目の巨人。

「僕がリードしてあげるから、やってみなよ」

突然消えるベルナルル。おそらく乗り込んだのだろう。ただ一つ目の目を赤々と光らせてその背負う怒りを片手で持つ。

「行くぞ、マッシヴ」

ベルナルルの声。そして、大きくその手の怒りを振り上げる巨人。

「クエーク・アンカー！！！！」

それは大地を切り裂く。敵は後退する。そして、その隙にカイザリ

オンによる巨人。

「やあ、無事かい？」

「・・・あなたは何者なんですか？」

「君の助けをするんだ、そういうことを聞くべきではないなあ」
そして、真面目な声音になるベルナル。

「さて、では軽く教えておく。カイザリオンの武器は主にその両腕のカイゼルブレードとギャザッシュカノンのみだ。だが、カノンはエネルギーを多く使い、連射は不可能。よって格闘戦主体になる」
廻はカイザリオンのブレードを出す。粒子ビームの刃が両腕より出る。

「僕が前の二機を倒すから、踏み込んで一機葬ってね」
三機で固まっていた敵を見て言うベルナル。

「それじゃあ、行くぞ!!」

驚くほどの速さで接近する灰色の巨人。遅れまいと、カイザリオンを走らせる。手にした碇を振り下ろし、胴を二分される二機。追いついた廻は残りの一機の懷に踏み込み、その肉を切り裂く。

「いいよ、その調子だ」

近づいてきた一機を両断する巨人。

「じゃ、僕はこれで」

廻が振り向いた頃にはもういない。やけくそ気味に廻が叫んだ。その間にも近寄る四つの機影。

「しかたない、行くぞカイザリオン！」

『了解した』

まず一番近い機体を切り裂く。次に両サイドから来る敵の首を落とす。そして残りもその首を落とす。そう連想し、集中する廻。予想通りの行動をする敵の腹部に両腕を突き出し、切り裂く。視界の両側から来る敵を回転して首を落とす。残りの一機。勢いのまま、斬り倒す。その首が宙を舞う。

「・・・敵は？」

『もう存在しない。元の場所に転送する、主よ』

「その前に、次からは事前に知らせてくれ」

『御意』

ベルナールと、巨人は去ったカイザリオンのいた大地に立っていた。そのベルナルの前に次元の歪みが現れる。そしてそこから現れる夜剣奏。

「何をしているんだ？」

ベルナルに問う奏。肩を上げて、さあと言うベルナル。

「どーもねえ、彼を見ていると、あいつを思い出すねえ」

「……ボーン、か」

「本質的には似ているよ、二人は。だからこそ、惹かれるのさ、わかるだろう？ 君も夜剣廻なのだから」

「……」

「ま、そういうことさな」

次元の歪みに入っていくベルナル。それに続く巨人。それを見る奏。

荒廃した世界。幾度も見た光景。それを見ても、何の感慨もない。あるのは今だけだ。

奏は次元の歪みに入り、この世界を去って行った。

戦闘指南（後書き）

グランマツシヴA C・・・全長12メートル。肩が大きく出た灰色の機体であり、丸い頭部の赤い巨大なスコープが特徴。身の丈以上の長さの巨大な碇「クエーク・アンカー」を使う。A Cは「アクター」をさし、この世界でのベルナールの役割を暗示する。

獅子雷帝

「クソウ、行くぞ、アークセイバー！」

次元の狭間を駆け抜ける一体の獅子。その後を追う、異形の者たち。逃げ切れないことを悟った獅子が振り向く。

「アークゲート オン・・・チェンジ アクロ・クロスタード！！」
足元に出現する文様。そして、光を纏い姿形を変える獅子。光が辺り一面を包み込む。

朝の陽射しが気持ちいい。夜剣廻の一日が始まる。昨日の件でベルナルに聞きたいことがあるが、そんなことよりもまずは目先の問題である。ナツキのことだ。ここ二日、主にベルナルのせいでナツキの機嫌は悪い。あまりにも廻との時間が少なかった（はたから見ればそうではないのだが）のが彼女を不機嫌にさせている。

だが、今日は土曜日。学校もなく、ベルナルの呼び出しもない。そう思っている廻に来る電話。携帯を取り画面を見る。知らない番号が表示されている。取り敢えず出てみる廻。

「もしもし・・・」

「ああ、おはよう廻クン。いやーいい天気だねえ」

あろうことかベルナルである。迷わず通話を切る廻。そして携帯の着信拒否をしようとしたところに家のチャイムが鳴る。父母、そして兄は各々の用事で朝からいない。嫌な予感を感じながら開けて見ると、

そこにはスーツ姿の白髪男がいた。

「いやー、廻クン。ごきげんよう」

「こっちは全然、ご機嫌じゃないんですが…」

イライラする廻。その廻を見るベルナル。

「んんー？ ああ、君の愛しのナツキクンも呼んだから安心してよ。では、入ろうか」

さも、自分の家かのように侵入するベルナル。ため息をつく廻。

聞いたところによると、廻、ナツキに担任が配り忘れた進路の紙を届けに来たらしい。ナツキをこっちに呼んだのは単に面倒だったからだという。

「いやー、わるいねえナツキクン」

悪びれた様子のないベルナル。ナツキは冷ややかにその男を見る。

「申し訳ありませんが先生。これから廻と予定があるので帰っていただけませんか？」

さっさと消えろ、このヤロー。私と廻の時間をつぶすな、失せろ。

目がそう語っていた。それでもなお、にこやかなベルナル。

「若いつていいねえ、僕にも昔は・・・」

急に遠い眼をするベルナル。だが、それも一瞬で消える。

「おお、そうだ。そんな若い二人に」

懷から二枚の紙を出す。それを見ると、

「プールのただ券？」

「いやあ、あったのを忘れていたんだ。早くつかんきゃいけないんだが二人で行ってらっしゃい」

そう言っただけでさるベルナル。

五月だとまだ少し肌寒いがまあいいだろう。何故なら、彼女は嬉しそうに顔を輝かせているのだから。

準備をして自転車でプールに向かう二人。三上崎一デカイプールで評判の場所が目的地である。廻は運動がからきしダメなのに、足の速さは陸上部員も真っ青なレベルであり、自転車をこぐことにもそれが現れていた。そのため彼女を置いて行きそうになり、怒られる廻。

プールに着いて、さっさと水着に着替える廻。泳ぎも特別できるわけでもないが、仕方がない。楽しめればそれでいい。

しばらくしてナツキが来た。赤い水着で少し、露出が多く感じられた。彼女は付図かしく、おずおずとこちらを見てくる。廻は廻で、頭がそれでいっぱいになっており、ぎこちなく彼女の隣に行った。

その後は廻もナツキも気にせずに夕方まで楽しく過ごした。満足げな彼女の顔を見て癒される廻。

ナツキの家の前で別れて帰宅する廻。父母はいないが、珍しく兄がいる。

「遅かったな、廻。飯はもうできてる。食うだろ？」

エプロンをしている兄、奏。若干シニールだが、兄のためにそれは言わなかった。

「うん」

そう答える廻。

そして、テーブルに置かれた兄の用意した晩御飯に手をつけようとしたその瞬間に。

吹き飛ぶテーブル。そして。

倒れている、一人の少年がいた。

驚く廻。

「取り敢えず、生きてるか？」

冷静な兄。少年の腹が鳴る。

「腹、減ったーーーーー」

低温の絞り出すような声を上げる少年。

獅子雷帝

ガツガツと食事をする真っ赤な髪の少年。箸は使えなさそうだったのでスプーンを使ってご飯を食べている。本来廻と奏が食べるはずの食事少年の腹に消えてしまった。二人はついさっき出来たカップラーメンをすすっていた。

「いんやー、三日間なーンも食ってなかったんだよねー。あ、俺の名前はコウガ・レイター。よろしく」

そしてきよろきよろと見るコウガ。

「いやー、ここ、俺の知る世界じゃないねー」

ビクッと反応する廻。目を細める奏。

「信じらんねーナ。あいつらに追われて咄嗟に使ったゲートでこっち側に来ちゃったのかなあ…」
呟くコウガ。

「もしや、お前の住んでいた世界とは霊皇界か？」

奏が尋ねる。廻は兄もこの手のことを知る人物なのかと驚く。

「そうだけど…ああ、そうだ、まだ聞いてなかった。おニーさんとそっちのの名前」

「…俺は夜剣奏」

「夜剣廻。17歳だよ」

なんとなく年齢を言う廻。

「へえー、俺とおんなじ歳か。よろしく、廻、奏」

「…それで、霊皇界のものがなぜここに？」

「待って。霊皇界って？」

口を挟む廻。こちらを向く兄。

「霊皇界。この世界とは別の次元に存在する世界だ。『気』と呼ばれるものにより、万物が構成されている。新属、霊獣、霊人といった者たちがその世界に住んでいる」

「…なんでそんなこと知ってるんだよ」

さあな、という奏。

「靈皇界のものとええど、世界を渡ることとはできないはず。それがなぜここに居る？」

「逆に聞いてもいい？なんで靈皇界のことを知っているんだい、奏？」

「聞いているのはこちらだ。答えろ」

威圧する奏。黒いオーラが見える。

「・・・俺がここに居んのは、ある奴を追って来たからだ。そいつは俺の因縁の相手なんだが：あろうことか、へんな連中であってね。必殺技使って逃げようと思ったら、この世界に居て、おまけに、アークセイバーはどっかに消えるし」

肩を落とすコウガ。

「なあ、ここに泊めてくんね？俺さあ、あいついないとなーんもできねえしよお」

頼むよー、と泣く少年。仕方がない、と奏が廻を見る。

「お前が世話しろ。この野生児」

そう言って部屋を出て行こうとする奏。その背中に言う廻。

「どこ行くんだよ」

「仕事、さ」

残された二人は廻の部屋で奏には内緒に、ということで互いのことを話した。まずは廻がカイザリオンについて話して聞かせた。

「へええー、すっげーな。それ。でも、俺のもすげーぜ！」

手が光るコウガ。

「これが『氣』だ。俺らの世界じゃみーんな使える。俺の世界にはこれを使って操るロボットがあるんだ。それを『獣心装』って言うんだ。俺にもあったんだけど・・・」

さっき言っていたアークセイバーのことだろう。いろいろ大変だな、

と肩を叩く廻。わかってくれるか、と涙を浮かべるコウガ。二人の少年は固く握手し、お互いに絆を深くしたのだった。

一方。奏はベルナルを訪ねていた。

「イレギュラーが起こった」

「へえ、君がイレギュラーなんてね」

ベルナルがコーヒーをすすする。奏は煙草をふかしている。

「霊皇界から事故で来た奴がいる。厄介なことだぞ」

「うーん、確かに。あれは奴らをおびき寄せるよなあ、『気』はため息をつく奏。

「本当に俺のいた世界とは何もかも違うな」

「君がいるせいじゃない？」

「お前のせいだろ、ベルナル」

「かもね」

「いや、違うな。やはり俺、いや、『夜剣廻』の存在のせいだろう」

「さあね。でも、その少年、的にはならないだろう？」

「多分な・・・」

「見方は多い方がいいよー。これは戦争だからねえ」

話の深刻さの割に、のんきにコーヒーを飲むベルナル。思えば昔っからこういう奴だったな、と煙草を灰皿に押しつける奏であった。

獅子雷帝

夜が明けようとする頃にそれは突然起こった。次元の歪みが直にこの世界へ現れたことを、カイザリオンより知らされる廻。床に敷いた布団より起きて（ベッドはコウガに使わせている）カイザリオンの内部へと転送される。

「敵は？」

『どうやら、あの少年を追って来たものらしい。霊皇界の生命体によく似ている』

街中に現れたのは黒い竜だった。今まで戦って来た機械の化け物とは違い、生物らしかった。

「ん、なんだ・・・？」

突如、竜の腹から職種のようなものが付き出て、身体を包んでいく。絶叫し身をよじる竜。しばらくすると、黒光りする、機械生命体になっていた。

『寄生型らしいな』

どうやら、あれも機械の化け物らしい。他の生命体と強制的に融合するタイプらしい。

「そうと分かれば倒すのみ。行くぞ、カイザリオン！！」

一気に跳躍し、竜の真下に入り込むカイザリオン。両腕より出ているビームの刃でその細い竜を斬り刻もうと振りかざす。

しかし、その刃は見えない『何か』によって阻まれる。

「いったい・・・？」

『恐らく、気の力であろう』

気。霊皇界において万物を構成する要素。その力はあらゆることに転用される。防御にも、攻撃にも。

突如のしかかる重力に、カイザリオンは倒れこむ。

「なんだ、この、力は・・・？」

機械竜が倒れた巨人をその蛇のような体で縛り上げっる。ギシギシ

となる、カイザリオンの肉体。

「くそっ、このままでは……?」

「アークセイバー……!!」

天より、一対の光が落ち、竜をカイザリオンより引き離す。光は形をなして行き、獅子のような機械に変形していく。それに近寄る人影。コウガ・レイテ。

「おう、廻! 危ないとこだったな」

「それは……?」

獅子の腹のコクピットらしきものに乗るコウガ。

「こいつが俺の獣心装、『獅子雷帝』アークセイバーさ!!」

コクピットに乗りながら頭をかくコウガ。

「いやあ、駄目もとで叫んでみたら来てくれたよ。さすがアークセイバー」

唸るアークセイバー。

「じゃ、やるか。廻は休んでろよ」

機械竜に駆けていくアークセイバー。炎のような光を纏い、夜の闇が明ける世界を照らす。

「取りつかれてしまったなら、悪いけど倒すぜ」

機械竜に言うコウガ。跳躍するアークセイバー。

「マズル・シャイニング!!」

口より光の球弾を放つ、獅子。それをよけて迫る竜。

「避けるのは見切っていた! こっちが本命!!」

さらに跳躍し、前肢を突き出す。爪が竜を切り裂く。血が流れ出るが、そこを覆っていく触手。

「再生するのか……」

後ろのカイザリオンのところまで後退するアークセイバー。

「廻」

「動きを止めればいいのか?」

コウガの言いたいことを察する廻。ギャザッシユカノンのチャージ

をする。

「そこにとどめをぶち込む。いけるよな、廻」

「やってやるさ」

チャージを終えるカイザリオン。狙いは機械竜。

「行くぞ！ギャザッシュカノン！！」

高エネルギーが竜を襲う。身体を焼き尽くさんとするエネルギーに耐える竜。その身体は今なお再生している。そこに飛び上がるアークセイバー。

「アークゲート オン・・・チェンジ アクロ・クロスタード！！」

文様がアークセイバーの四肢の真下に出現し、光りだすアークセイバー。そして、一瞬後には鬣をなびかせて、空に佇むヒト型の機体がそこに居た。

「行くぞ、アクロ・クロスタード！！」

両手をクロスさせ、天高く振り上げるアクロ・クロスタード。

「赦せ、我が友よ・・・」

黒い竜のなれの果てを見て呟くコウガ。

「必殺！ファイナル・パニッシュメント！！」

両腕より迸る、雷の波動。未だギャザッシュカノンにより、動きを止められている竜に向かい行く波動。そしてそれに追いつき、拳を振り上げるアクロ・クロスタード。貫く拳。

「爆散ッ！！！」

竜の体が爆発する。それと同時に再び獅子型に戻ったアークセイバーからコウガが出る。そんなコウガはカイザリオンに拳を突き出し、やってやったぞ、と笑いかける。そんな彼を頼もしく思う廻。二人の少年は熱く、握手をする。今日会ったばかりの二人の間には絆が存在していた。

そうして、夜が明けていった。世界の修正力により、この騒ぎを覚えているのは当事者のみとなった。

その後、兄の知り合いから預かった、ということで正式に夜剣家

に住むことになったコウガ。しかし、この時まだ廻は知らない。兄の手引きで彼が水瀬高校2年3組に転入してくるとは・・・。

獅子雷帝（後書き）

アークセイバー・・・全長8メートル。獅子の形をした『獣心装』という機体。霊皇界に漂う要素、『気』によって操作される。機体そのものにも生命が宿っているらしい。

アクロ・クロスタード・・・全長11メートル。長い髪を持つ、ヒト型の獣心装。アークセイバーの真の姿。『気』の消費が激しく、コウガもなるべく使うのは控えている。

彼方からの使者

「今日は楽しみにしてろよ」

いきなり食事中に廻にそう言ったコウガ。あれから3日、もう彼は夜剣家に馴染んでいた。父も母も奏の知り合いから預かった子だと言うと、何の疑念も感じずにコウガに接した。懐が広いのか何なのか、と廻は呆れた。コウガの言ったのは、帰ってきたら何かするのか、と思い、ドツキリでもする気なのだろうと思った。4日間過ごしてみたが、彼はその辺の高校生と同じだ。いくら異世界から来たとは言っても。

ナツキをたまには迎えに行くかと思い、彼女の家に行く。わずか200メートル離れた場所。本来はもっと遠かったが、中学前にここに引っ越し、距離が近くなった。お陰で高校も近く、彼女と登校できるわけだが。思えば、兄の一言でここに来ることになったのだ。最近、兄に対する謎の深まるばかりの廻。いつか聞き出そう、と思い、ベルナルが知っているのではないか、と思考転換する。

ナツキを迎えに行くと、すぐさま出てくる彼女。鞆もしっかり持っている。少し早いがまあ、いいか。と廻は思った。一方の彼女は廻が来てくれて嬉しくてたまらないようだ。たまには来てあげよう、と思った廻であった。

学校に行くと、中臣が寄ってきて言う。

「今日、転校生が来ると、担任殿から聞いてな。珍しいとは思わんか？」

こんな途中に転入する奴なんているのか、と廻。ナツキもそれはないんじゃない、まだ一学期はじめだよね、と返す。チャイムが鳴り、担任が入ってきたので各々の席に行く三人。廻とナツキは隣同士なので行く方向も同じであった。

「起立、礼」

中臣が言う。これは彼の仕事なのだ。着席、と言うと、担任がゴホンと席をして言い始める。

「じゃあ、ホームルームを始めます」

初老の担任が言う。

「えー、今日は転入生がいますので、紹介したいと思います。何分急に決まったことなので、皆さん仲よくしてあげてください。では入ってきてください」

入ってきたのは・・・

間違はなくコウガ・レイターであった。

「はじめまして、霊帝 甲賀です。これから、よろしく願いします」

奴にしては控えめに言う。担任が書いた名前も日本風だ。どうせなら、もっとまじな偽名にすればいいのではないか、とも思った廻。朝奴が言っていたことはこれだったのだと気付いた廻であった。

あろうことか、奴の席は廻の隣となった。授業中は案外真面目であり、休み時間も奴は囲まれて、話に花を咲かせていた。話しかける隙が全くなかった。

昼休み、皆がそれぞれ、彼と会話をしに行っている。ナツキもそうだ。廻は頭を抱えなくなった。なんで奴がここに居るのかを、事情を知っているであろうベルナルのところに行く。相変わらずコーヒーを飲んでくつろいでいるベルナル。仕事をきちんとしているのか甚だ疑問だ。

「で、兄貴から事情聞いているんですよね？」

「うん、勿論。彼の手引きで3日前には転入が決まったらしくてね。戸籍もでっち上げたそうだよ」

「いつも思うんですが、兄貴は何の仕事してるんですか？」

ヤバい仕事ではないよな、と暗に確認する廻。相変わらずにこやかに笑う、白髪の男。

「さあねえ。僕はただのカウンセラーだし」

ただのカウンセラーが聞いて呆れる。ならどうして色々知って、

侵略者と戦えるのか。聞いたところでこの人は答えないだろう。

「ま、見方は多い方がいい。事情を知っている味方はね。ああ、僕もその一人だからね」

コーヒーを飲み目を細めてこちらを見る。果たして、何を思うのか。廻にはわからなかった。

「おや、もうすぐ時間だよ。戻った方がいいんじゃない？」

渋々退散する廻。そこに走るノイズ。

「っう！？」

「・・・敵か」

ベルナルが確認するようにつぶやいたので頷く廻。

「ふむ、僕が処理しておくよ。カイザリオンに言っておいてね。さ、お戻り」

そう言って消えるベルナル。本当に何だ、あの人。と思うが、彼に任せて自分は教室に戻る。

相応強い相手なのだということが彼の様子から分かった。あのノイズはいわば探知である。強大なものが来たという。果たして自分に勝てるのかは分からないが、ここで廻を殺させるわけにもいかない。いざとなったら、奏が来るだろう、とコクピットの中で楽天的に考えるベルナル。

灰色の巨人が碇を構えて立ちふさがる。

「じゃあ、行きますか。グランマツシヴ」

巨大な影が一体、巨人を見下ろしていた。

彼方からの使者

昼の授業。廻は上の空だった。ベルナールがどうなったのか、気になって仕様がなない。なんだかんだ言っても彼も自分の味方なのだから。その廻に小声で話しかけてくるコウガ。

「もしかして何か来たのか？」

「・・・ああ。今、ベルナール先生が戦っているんだ」

「助けに行くか？」

「この状況で？」

「気で幻影を作る。これでしばらくは・・・」

何か念じるように目を閉じるコウガ。その瞬間、コウガと廻は二人になった。その隙に廻はカイザリオンに転移を頼む。二人の本体が転送され、幻影のみが教室に残った。

二人とカイザリオン、アークセイバーは荒野に立っていた。見飽きた風景。滅んでしまった世界の名残。

「おい」

コウガが指差す先で行われていた戦闘。赤い翼をもつものに一方的に蹴られるグランマツシヴ。大地に沈むその機体。

「助けるぞ、コウガ！」

「承知！」

二人が己の機体に取り込む。目を光らせて走り出す、二機。その二機を認めると、赤い翼の敵が寄ってくる。

「待て！今の君たちではそいつには、グラシヤスには・・・！」

ベルナルの焦った声。普段は出さない彼の声から、危険を感じるが、このままでいいわけがない。カイザリオンが両腕より、刃を出し斬りかかる。挟み打ちをするように、後ろに回り込み、爪を振りかざすアークセイバー。

両手を広げ、バリアのようなものを張る、グラシヤス。二機の攻

撃はそれの前に阻まれる。

『怨』

それは何かを発する。同時に、弾き飛ばされる二機。駆け寄る、ぼろぼろのグランマツシヴ。

「大丈夫かい、二人とも」

「ああ」

「はい」

立ち上がる二機。三機を前にしても微動だにしないグラシヤス。

「あれは？」

廻が問う。

「グラシヤス。僕らの戦う次元破壊者の一体。ヴァーウルの右腕」

「フッフ、未熟だな、貴様らは」

喋りだすグラシヤス。

『ゆえに取り込みやすいのも事実』

グラシヤスの両腕に収束する力。

『螺旋を終わらせはしないぞ・・・！』

放たれる、エネルギー。三機を襲おうとしたその時。ビームの膜がそれを阻んだ。

『・・・・・・・・アルクオーネ。ナイトブレイドか・・・・・・・・！』

上空より飛来した白い鎧神慨装。

「無事か、廻、コウガ、ベルナール」

「この声：兄さん！？」

「やっと来たか」

「・・・・・・・・」

三者三様の反応。忌々しげに顔を歪めるグラシヤス。

「さて、ここで芽を摘ませるわけにはいかない。行くぞ、グラシヤス。とくと見るがいい。運命に背きし我が姿、業の深さを味わうがいい！」

空を奔るアルクオーネ。迎え撃つグラシヤス。上空を自由に飛び回

る二体。

「ギャザッシュマグナム！」

放たれた攻撃を受け止めるグラシャス。瞬時に駆けよるアルクオーネ。それを察知し、避けようとするが、

「遅い！」

両腕取り刃を出して、繰り出される斬撃に圧倒されるだけである。止めとばかりに、足で蹴り飛ばし、地に叩きつけるアルクオーネ。

『くくくくく……歴代最強とはいったものだな』

呟く怪物。

『無数の世界。その中でも、特に貴様だけがその異能に至った。我々にはその異能が必要だ…』

笑いだすグラシャス。

『和つの命を引き換えにでもなあ!!』

飛びつくグラシャスを斬り伏せようとするアルクオーネ。身体は裂かれ、首の身となったグラシャスは口を大きく開き、アルクオーネに噛みつく。

「いけない！奏、叩き落とせ！奴は君とそれを取り込むつもりだ……！」

ベルナールが叫ぶ。

『ふははははははは！もう、遅い。融合はすではじまっている……！』

頭を抱え出すアルクオーネ。首がその身体に溶け込んでいく。最悪のシナリオが幕を開けようとしていた。

彼方からの使者

夜剣奏の乗る鎧神慨装アルクオーネはグラシヤスに乗っ取られた。ベルナルはそれが分かった。感じるオーラが今までのものとは違う。その目は妖しく光っていた。

「奏、聞こえるか？」

ベルナルの問い。それに返ってくる言葉はない。廻やコウガはもう何が起こっているのかを理解できていない。

『無駄なことよ。こやつはもはや、我々が肉体。無駄なことよ』
グラシヤスの声。

『みなぎる力。これが螺旋の力・・・！素晴らしい・・・』
腕を振り上げるアルクオーネ。

「ッ！！いかん！！！」

グランマツシヴを咄嗟に動かし、カイザリオンとアークセイバーの盾となるように立つ。そして放たれる閃光に、グランマツシヴは焼かれていく。

「うおおおお！！？」

爆発するグランマツシヴ。

「先生っ！！！」

廻の叫び声。

「ちくしょう！仕方ない！兄貴を倒すしか・・・」

「どうにかしてコクピットを外せば助けられるんじゃないか、廻」

「・・・やってみよう、コウガ」

「おう！」

二機が魔人めがけて突進していく。

『馬鹿め！灰にしてくれる！！』

再び腕を振り上げようとするアルクオーネ。しかし、その動きが止まる。

『何い！！？』

二機がそこに迫る。

「アークゲート オン・・・チェンジ アクロ・クロスタード!!」
変身し、アクロ・クロスタードとなるアークセイバー。拳を振り上げ突き出す。それに合わせる廻。

「喰らえ! ギヤザッ シュカノン!!」

拳にエネルギーをため込み、放つ。二つの拳がアルクオーネを貫く。

『ふふふ・・・ははははは・・・!!』

笑い声が響く。そこにはあの攻撃を受けてもなお立っている、魔人がいた。

『廻、コウガ。無駄だ。その程度では俺は倒せない』

響くのは奏の声。

「兄貴!! 無事なのか?」

廻の叫び。だが、二機は警戒を解かない。

『ああ、最高だよ。なるほど、この力か...! これがあれば、我が悲願も叶えられよう。我が名はナイトブレイド。夜を切り裂き螺旋を切り裂くものなり・・・!!』

高笑いする奏。そこに響くベルナルルの声。

「思い出せ、夜剣奏・・・いや、夜剣廻! お前の目的はそんなことではない! それでは、お前の敵である、ヴァーウルと同じだ! 君が戦ったもう一人の自分と同じ末路を辿るつもりか!？」

ぼろぼろでもはや、両腕もなく、ただスコープのみが虚しく光るグランマッシヴに向くアルクオーネ。

『思えば、彼女を失ってから多くのことがあった。だが、その中で俺が満たされ救われたことは一切なかった! この世界もどの世界も俺を受け入れはしなかったのだ!!』

「それでも、君は戦うべきだ、運命と! そう僕に言ったのは君であった。忌むべき存在、兵器である僕やボーンにそう言った君が、その運命に負けるのか!？」

『うるさい負け犬め!! 欠陥品のコピーに用はない』

振り上げる腕。それを抑えるカイザリオン。

「止めてくれ、兄貴！どうして、こんな・・・」

『いいことを教えてやろう、廻。俺の本当の名は夜剣廻。様々な世界で呼ばれ方は違ったが、俺はまぎれもなくお前と同じ存在だった。そして、お前のなれの果ては俺なのだ！これは数多の螺旋が絡むこの世界の鉄則！何度も繰り返し、その度に始まる夜剣廻の螺旋。永遠に奏でられる宿命。だが、それもここで終わる。廻、お前の死によってな！！』

「それはできないわ。だって、あなたを送ったのはそのためじゃないもの」

いきなり現れたのは一人の少女。

『貴女は・・・！？』

「思い出したかしら、ナイトブレイドさん
にっこり笑う少女。

「ミライ・フェスター？」

ベルナールが傲然と呟く。

「お久しぶり、ベルナール。私の本当の名前はミライ・Y・ハヤミ
っていうの。覚えておいてね」

笑う少女。それに向き合うアルクオーネ。

『魔女め。いまさら何を・・・！』

「あなたに螺旋を断ち切ることが出来ないならば・・・」
少女の顔に今までのにこやかな顔はない。

「消します、あなたを」

『おもしろい！やって見せろ！！』

光が落ちる。そこに居たのは三体目の鎧神慨装。

「いきましよう、エクシオン」

決別の定め

白い装甲は光り輝き、その背からは天使の翼が生えていた。神々しいその機体はアルクオーネの前にゆっくりと舞い降りる。

『エクシオン、だと・・・？馬鹿な、そんな鎧神慨装存在するはずがない！』

奏の声。彼自身始めて見る機体に動揺しているのだ。

「ふふふ、数ある世界のすべてを知っているなんてうぬぼれを抱いていらっしやるの？」

笑いながら問いかける少女。

『ふん、その減らず口を閉じさせてやろう・・・ギャザツシユマグナム！！』

「喰らうのですかっ」

放たれ、複数に分かれる光弾を難なく避ける少女の機体。

「お返しよ！天征亮・華月夜！！」

エクシオンの翼より無数の影が現れて、アルクオーネを襲っていく。ビームフィールドを張り、防御に徹するが影はそれを貫き、肉薄する。そして串刺しになるアルクオーネ。

「やった、のか？」

コウガが呟く。それを見ていたベルナルが答えた。

「いや、あれでは彼は死なない。彼はヒトではないからね・・・」

その言葉通り、立ち上がり修復していくアルクオーネ。半分以上挟まれた胴も、斬り落とされた両腕も瞬く間に回復していった。

『この程度で俺は死なない・・・』

「さすが、ですね。でもこれでおしまいにします」

再び出てくる影。放たれたそれを避けるアルクオーネ。

『同じミスはしない！！』

「その判断があなたの敗因です！天征亮・爆四散！」

狙いを外れた影が突如爆発する。連鎖して次々と爆発する影。それ

はアルクオーネを囲み、炎の檻を形成する。

「最終審判・・・」

舞うように飛び上がり、空間よりひと振りのレイピアを取りだす。顔の前で構え、急降下する。

「・・・滅、殺、印・・・!!」

光を纏うエクシオン、魔人の足元に魔法陣が出現する。

『動けぬ・・・!?』

「うああああああ!!」

飛び込むエクシオン。斬り伏せられるアルクオーネ。上半身と下半身は断たれている。その傷口はジワジワと焼けていく。

「斬った場所がどんどん燃えていきます。再生は無意味です」

少女の宣告。上半身を両手を使って起こすアルクオーネ。その身体は徐々に消えていく。

『・・・・・・』

沈黙が辺りを包む。ぱちぱちと燃える音のみがあった。

「さあ、ここで終わりに・・・」

『フッフ、それは無理だな・・・』

奏の声。

『我が真の力をまだ出してはいない。子供の遊びは終わりだ。行くぞ・・・!!』

宙に浮きだすアルクオーネ。未だ傷口が燃えていたが、それも消えた。そして再生していく魔人。

『再生のみに終わらない・・・より強くなる・・・』

機体の装甲が禍々しく変化する。頭部の角がより伸びていき、背部より、悪魔のような翼が付き出て形を成していく。周囲に満ちる負のパワー。

「まさか今ので・・・?」

呆然とする少女。

『戦えば戦うだけ、この機体は強くなる。我が半身をなめるな・・・』

』

胸の前に収束するエネルギー。

『消えろ、そして嘆くがいい』

放たれる光線。ビームフィールドを展開するエクシオン。

「くう・・・駄目・・・」

力負けしているのは明らかに少女である。このままでは負ける。

廻は自分の力で兄を止めることは無理だとわかっていた。だが、このままでもいいわけがないのだ。だから彼は兄に向かってカイザリオンを走らせる。

あんたは僕にとって、最高の兄貴だ。今までも、これからも！だからあんたが間違いを起こそうとするのを止めてやらなければいけない！使命感のようなものが少年の胸の中にはあった。

「兄貴！止めて見せる、あんたを」

『俺の助けなしには何もできないお前には不可能だ！たとえお前が夜剣廻だとしても！』

兄弟の戦い、これも定められた運命なのか。ベルナールは朽ちた機体の中、そう呟いた。

決別の定め

廻は思った。あの攻撃が一度でも当たればカイザリオンは耐えられない。ならば。

（当たることを考えるな、ただ避けることのみに集中しろ！）

カイザリオンに、自分に言い聞かせる廻。突進するカイザリオンに、両腕のビームの刃を突き付けるアルクオーネ。避ける廻だが、反応が、そして動きが鈍い。

（だめだ、足りない。まだ、まだだ。もっとスピードを・・・）

しかし、アルクオーネの攻撃がカイザリオンを捉えた。

『終わりだ、廻・・・！！』

奏の声。ハツとする廻。

（まだ、終われない、こんなところで！！）

湧きあがる思い。まだ生きたいと願う心。そして、よぎる、ナツキの、顔・・・。

「まだ、終われない・・・！！！！」

『ならば願え、さすれば、得られよう。カイザリオンの力の一端を』
脳裏に響く謎の声。しかし、廻はその声に従い強く願った。あの攻撃を避けられるだけの速さを。魔人を止める力を、と。

迫りくる刃がカイザリオンを切り裂いた。

『！！！！』

しかし、そこにカイザリオンの残骸はない。

「ここだっ！！」

アルクオーネの上空より降りかかるカイザリオン。魔人は回避運動を取るが遅かった。カイザリオンの閃光のような速さと繰り出される一撃で片腕を持っていかれる。

『まさかな・・・死の淵において進化、いや、スピードの身を特化させ、装甲を犠牲にしたのか・・・！』

「助かった、のか？」

コウガが呟く。

「ひとまずは、ね」

ベルナールがそれに応えた。

「ですが、拙い状況です。これからが本当の戦いです」

少女が言う。廻は兄の消え去った痕を見て誓う。

（兄貴、俺にはどうして兄貴がああなったのかは分からない。けど、止める。それが俺の役目だから！）

決意を胸に少年はそれを見上げた。滅びた世界の空もまた、青かった。

決別の定め（後書き）

極^{ハイ}カイザリオン・・・形式ナンバーK-TOΔ+▽「S」。高機動戦特化型のカイザリオン。装甲が薄くなった分、驚異的なスピードを得た。武装に関しても変化しておりギャザッシュカノンは威力が落ちた分、射程が伸び、連続して三度まで発射可能となっている。

戦う理由

兄の失踪。両親の記憶からはすっぽりと、「兄」の存在が消えていた。あの時、あの場に居た者以外の記憶から、兄の記憶は無くなっていた。ナツキさえも。

「彼自身の力によるものです」

謎の少女、ミライ。何故か廻の家に住んでいる。両親も何も言わない。響は廻の知らないことを話してもらうために、ベルナールも来ている。当然ながらコウガもいた。

「まず、何から？」

「・・・あなたはいつたい？」

少女の問いに答えた廻。

「私はミライ・Y・ハヤミ。他次元からいました」

「何故、鎧神慨装を持っている？」

「何も鎧神慨装が一つしかない、というわけではありませんよ。過去、現在、未来。どの時点においても複数の鎧神慨装が存在しています」

「兄貴との関係は？」

「前の世界、ベルナールさんもいらった世界で少し」

ベルナールを向く少女。白髪の子は特に何も言わない。

「私も、あなたたちと似た存在ではあります。螺旋を止めるために奔走している点でも、同じ鎧神慨装の担い手としても」

「兄貴は自分のことを『ヤツルギ カイ』って言っていた。あの意味は？」

廻の質問。

「それには僕が答えるよ」

ベルナールが話し出す。

「彼の本名は夜剣 廻。世界によってはナイトブレイドとも呼ばれ

ている。こことは違う世界、違う次元のヤツルギ カイ。ゆえに君と彼は同一の存在であった、というわけだ」

「兄貴と、僕が？」

「うん、そう。彼の世界は滅びてしまっただけ。それ以来、同じ存在を助けて滅びの連鎖を止めようとしてきたんだけど…」

「彼は敵の手に堕ち、自らが憎むべき存在となってしまうたのです」少女が話し出す。

「元々、あなたたち『夜剣 廻』には暗黒面が存在します。いえ、全ての人間の中に。しかし、彼の中には余りにも多くの闇があったのです。他の次元でも、墜ちたヤツルギ カイはいましたが、あれほどの力を持った者はいなかったのです」

「なーんか、誰かが実験している気がするな、それ」コウガが言う。頷く少女。

「破壊者ヴァール。全てはこの謎の存在の始めたこと。いつ始まり、終わりを迎えるのか知れない戦い、なのです。その中心に居るのは、夜剣 廻。あなたです」

「……何故、僕なんだ？」

「あなたが、鎧神慨装の、カイザリオンの担い手だから」

「あなたがやればいいだろう」

「私では無理なんです、そうしたくても。この螺旋を終えることのできる人物はあなただけなのです」

果てしない戦い。その戦いを終わらせるのも、始めるのも夜剣廻なのだ。宿命。運命。そのようなものがあるとしたら、このようなことを言うのだな、と廻は思った。

「少し、考えさせてください」
そう言って家を出る廻。

街の中を歩く。いつもの光景。戦いのない、穏やかな日常。そこに居る人々の平凡な顔。戦いがうそのように感じられる。うろうろしていると、彼女に会った。

ナツキ・エリクセン。

「あ、廻！」

廻の姿を認めると走り寄ってくる少女。

「今日はどうしたの？最近、何かに悩んでいるようだし・・・」
心配そうに見つめてくるナツキ。その瞳を覗き込む廻。知らないうちに彼女の背を超えていた。

「ナツキは、さ。もし、自分にしかできなくて、でもそれで、多くの人を死なせてしまうかも知れないとしたら、それをやるか？」
なんとなく聞く廻。

「・・・私は、ね。できないと思う。多分。だって怖いもん。自分がかわいいんだよ、やっぱり。でもね。廻のためならできと思うよ。きつと、そういうものなんだよ。身近な人を守りたいから、みんな何でもできる。仕事だって何だって、それは言えることだと思う。廻の悩んでいることはわからないけど、廻の望んでいるようにやればいいと思う」

そして一息入れるナツキ。

「それはきつと、間違ったことなんかじゃ、ないから・・・」
はつきり言うと言った。彼女という人間を僕は知らなかったのだ。まさか、こうも彼女が考えているとは。

「ありがとう、ナツキ」

お陰で決心がついた。

君と、この日常を守るために僕は戦う。相手がたとえ、兄であるうと。

彼が家に戻ると、少女とベルナル、コウガがいた。

「決意は決まったようですね」

「これからが厳しいけれど」

「俺たちが付いているよ！」

三人が言う。自分には仲間がいる。共に闘う仲間。そして、守るべきものがある。理由なんてそれでいい。

宿命も、螺旋も関係なく、己の意思で。少年は歩み出す。

戦う理由（後書き）

アルクオーネ・・・形式ナンバーK―T1Δ+▽。カイザリオンの負の姿。能力的にはほぼ変わらないが、ギャザッシユカノンよりも射程の短く威力の高いギャザッシユマグナムを使用する。

アルクオーネX（カイ）・・・アルクオーネがグラシヤスと融合した姿。能力的にも大幅にパワーアップしており、修復能力が高い。詳細は不明。

動く時

「フフッ、その程度ですか？」

「・・・舐めるな・・・！アークセイバー奥儀、甲賀武真骨！！」
駆け抜けるアークセイバー。それを受け止めるのは黒き不死鳥。

「コウガ・・・それでは、私を倒せません・・・。よく、見ておく
ことです。私と、あなたの実力の差を・・・」

飛び上がる不死鳥。炎がアークセイバーを包み込む。空中に浮かぶ
文様。文字の羅列が回りだし、世界は闇に包まれる。

「月下、我が魂は、鼓動する、終焉の光が、星を包む・・・」

「・・・！！くそ、逃げられ・・・」

「帰月闘隼・・・」

弾け飛ぶ閃光。

コウガが跳ね起きる。今日はベッドの上は廻が使っている。その
廻はまだ眠っている。寝汗が凄いことになっている。彼がこの世界
に來た理由。それは次元破壊者に追われていたためではない。真の
目的。それは自分の兄弟子を見つけ、倒すためだ。廻の手助けをし
ている現在でもそれは変わらない。

霊皇界において負けなしの兄弟子。何度も戦い、その全てにおい
て敗北した。彼にとつてそれは超えることのできない壁。

着替えて、庭に出る。そして、拳を突き出す。毎日の連鍛を怠っ
たことはない。兄弟子に勝つには、まだ何もかも足りなかった。

「・・・超えてみせる」

拳を握りしめるコウガ。そのコウガを廻は影から見ている。毎日の
積み重ねを、廻は見てきた。だからこそ、自分も何かしなければな
らないと思った。

（俺も、倒すべき、越えるべき人がいる・・・）

兄の顔、凶悪なアルクオーネの姿が思い浮かぶ。踵を返し、自室に戻ろうとする廻。そこにミライが現れる。

「お悩み、ですか？」

「・・・いつから？」

「さあ」

笑う少女。その少女に何かを感じる。何か、を。

「特訓でもしてみます？ お稽古なら付けてあげますよ」

こちらを見透かしたような発言。

「是非、お願いしたいな」

強くなりたい。勝たなければならない理由がある。だから、少年は頷いた。

とある次元。ベルナールは自分の愛機を見上げた。もはや、使い物にはならない両腕。装甲も崩れ、頭部のスコープが虚しく光るのみ。もう、駄目だな、と思うベルナール。

「相棒、長い付き合いだったが、これで、おしまいか・・・寂しくなるよ」

機械相手にしみじみとなる自分。だが、それでいいのだとベルナールは思う。執着があるということはつまり、人間らしいということだからだ。

「さて、どうするかね・・・」

どうするとはつまり、自分の機体である。あの世界で、まだ、見届けなければならぬことがある。それを遂行するための、鎧。

「・・・昔の仲間に出会ったのに、機体もこしらえる、か・・・」
ベルナールが呟く。どこに居るのかは分からないが、己の勘の告げる世界に行ってみるベルナールであった。

天までそびえ立つ塔。その前に座するのは一体の魔人、アルクォーネ。飛来してきたのは黒き鳥。

『よくぞ来た、夜剣廻。ついに、我が軍門に下る、ということか？』
「そういうことだ、ヴァーウル」

『クックク、良かろう。我と共に、この世界も、他の次元も、全てを統一し、ともに支配しようではないか・・・』
群がる機械の怪物。その中に佇む、一体の魔人。

（ここにも、鎧神慨装・・・。果たして、鎧神慨装とは一体・・・？）

『今、時は満ちた。次元の統一、我が宿願を果たそうぞ』
唸る怪物たち。魔人はその中心で高らかに告げた。

（・・・だが、そんなことはない。俺の目的は・・・）
遠い記憶がよみがえる。

（・・・俺の知る、ナツキを取り戻すこと）

動く時

高校にまたも転入生。それもまたしても廻のクラス。

「速水未来でーす！」

ミライであった。外見的にも問題ないが、実際のところ何歳なのだろうか、と疑問に思う。横のコウガも驚いた顔をしている。

休み時間に未来をつれて、廻とコウガは人目の付きにくい場所に移動する。

「どうして、来たんだよ？」

「いやー、なんでだろうねえ」

適当に応える少女。

「味方は近くに居た方がいいでしょ？」

つまり分散を避けたいのだろう。ミライの言うこともよくわかる。

「・・・まあ、いいけどさ」

諦めた口調の廻。

「じゃ、そゆことで」

そう言って走り去るミライ。

「フリーダムだな」

「そーだな」

「ま、彼女らしいよね」

いつのまにか後ろに立っていたベルナル。

「そろそろ授業始まるよ？」

取り敢えず急いで教室に向かう二人。その後ろ姿を見ているベルナル。

「・・・さて」

振り向くベルナル。

「いい加減出てきてはどうです？」

鋭くなる視線。ベルナルの纏う気配が変わる。

「・・・」

そこに現れたのは黒いフードをかぶり顔を覆った人影。

「敵、ですか？」

「・・・確かに敵ではある。だが、あなたではない」

「ならば、夜剣廻、ですか？」

フードが否定するように動く。

「否。我が敵はコウガ・レイテーなり」

「・・・とすると、靈皇界の者ですか？」

「肯。奴に、伝えてはもらえまいか？ 貴様に私は倒せない、とな」
そう言って消え去ろうとする影にベルナールが問う。

「名前を聞いていなかったな」

「・・・サイガ・レイテー」

「!」

驚愕の顔をするベルナール。そのベルナールを放って去る影。

「・・・」

サイガ・レイテー。靈皇界一の実力者。広く知れ渡るその力。しかし、彼がヴァーウルのもとに走った、というのを噂で耳にはしていた。

「夜剣廻に、サイガ・レイテー・・・どうやら、最悪のシナリオを極めた状況になるようだな・・・」

早く、あれの準備をしなければならぬ。ベルナールは彼らしくもなく急いでどこかに走り去っていく。

「・・・それで、なにがしたいのだ、貴様は」

「私は己の修連のために、いるだけです」

「フン・・・」

「あなたも同じでしょう？ 何かを求めてここに居る、という点においては・・・」

「ほざいている」

「忠告しておきますが、そうやって虚勢ばかり張っていると、いつ

か身を滅ぼしますよ」

「俺は死なん。絶対な」

「・・・まあいいでしょう」

「サイガ。貴様こそ、いつかその格闘家としての性が貴様を滅ぼすぞ」

「・・・ご忠告痛みいる」

二つの影。片方が消え、もう片方もしばらくして去った。

胎動する闇。それぞれの想いは闇の中をさまよう。

黒鳥の舞

ベルナールの言葉を聞き、コウガは憤怒する。

「ッ、サイガ・・・！」

カウンセラー室に響く拳の音。へこむテーブル。深刻な顔をする面々。

「敵は強大だ。予想よりはるかにね」

「そうね。今までにないほどの戦力を持っている。この戦いで、全てを終わらせるつもりかしら？」

ベルナール、ミライが言う。

「そんなこと、させない・・・」

静かに闘志を燃やす廻。

「ごめん、廻。俺、先にカタをつけたいことがある」

先の話でサイガ、という人物がコウガの追う人物であり、越えなければならぬ「壁」なのだろう。本来関係のない自分に協力してくれるコウガに感謝している廻はただ頷いた。

それをみてコウガは部屋を出る。サイガがどこに居るかは分からないが、近くで見ていることはわかっていた。

「待っている、サイガ・・・！」

あちこち歩いたものの、サイガの気配はなかった。夕日も沈みかけ、今日は諦めようとしたその時、奴は現れた。

「わざわざ、死にに来ましたか・・・」

振り返ると黒髪の男が立っている。

「サイガ・・・」

「久しいですね、コウガ。ですが、ここであなとも終わりです」
歪みだす空間。

「よろしいですよ、奏」

『承知した』

そして世界を移動するコウガとサイガ。

そこは靈皇界であった。気が辺りを満たし、木々が生い茂る文明とは程遠い地。

「ここで、決着をつけさせてあげましょう」

腕を構えるサイガ。そして飛び掛かる。

「獣心装を使うまでもありません。拳のみで戦いましょうか」

「……」

それを交わし、カウンターを仕掛けるコウガ。それを受け止めて右の拳でコウガを殴る。吹き飛ぶコウガ。

「実力の差が大きく出ますね、やはり」

「くっそ……」

血を吐き出すコウガ。口を拭う。

「それでは、お友達も救えませんか？」

「黙れっ！」

飛び掛かるコウガ。正面から受け止め肘を打ち込む。

「かはあっ！」

「甘い」

そして何度も技を叩きこむサイガ。

「撃、双、天、凝、印、刹、僻、龍、鵬！」

そして最後の一撃が襲う。

「鳳凰！！」

そこに割り込む影。

「悪いけど、そこまで」

クラーク・ベルナルだった。サイガは軽やかなステップで離れる。

「……」

「無事か、コウガ！」

「廻……」

廻にミライまでもいた。

「どういうおつもりで？」

サイガが聞く。

「仲間なんだな。やっぱり放っておけないんだよね」
ベルナールが言うと、頷く廻。

「仲間、ですか。素晴らしいですね。では、」

サイガの影より現れる巨鳥。

「仲間もろとも蹴り、喰い殺して差し上げましょう、コウガ!」

「カイザリオン!」

「アークセイバー!」

「エクシオン!」

三機の機体が現れる。そしてその上空に舞い上がる黒き鳥。

「鎧神慨装の力も見せていただきましょう。では参る・・・」

「もう一機居るんだよね」

頭上より降りかかるギロチンの刃。それを交わす黒鳥。

「このアークスタッドに迫るとは・・・!」

「新たな我が機体を刮目せよ。審判の刃、ジャッククロス」

立っていたのは白いのっぺらぼう。特徴も何も存在しないような真っ白な機体。

「おもしろく、なりそうですね」

サイガの血は湧きあがっていた。こうして強者たちと戦えることこそ、彼の真の喜びであるかのごとく。

黒鳥が空を舞う。

焰（ほむら）の魔人

黒鳥、アークスタッド。舞い上がる黒き不死鳥が急降下してくる。黒い炎をその身に纏い、四機に襲い来る。

「次転式ギロチン！」

ジャッジクロスから離れた空間より出現した二つの刃が黒鳥を襲う。それを避け、アークセイバーへと肉薄する。

「まずは、コウガ、あなたからです」

嘴が開く。ギチギチと音を立て、牙が現れる。

「黒鳥蹂躞ノ舞」

複数の黒鳥が現れたかのように影が一斉にアークセイバーを襲う。

「くそ、チェンジだ、」

「させません」

変身しようとするアークセイバーの首に撃ちこまれる嘴。

「やられるのを黙ってみていると思ったか？」

廻が接近する。カイザリオンは変身し、高速で黒鳥の影を振り払う。そこにエクシオンの攻撃が加わり影は消え、実体のみが残る。そこに降り注ぐギロチンの刃。

「やはり、四機相手は分が悪いですね」

黒鳥が地に降りる。

「チェンジ、ガリユネス」

大地より黒い何か、いや、気が現れて黒鳥を覆う。膨れ上がる殺気が霊皇界を包む。

「っ、こいつは！！」

コウガの焦った声。何かを言おうとするコウガはしかし、沈黙せざるを得なかった。突如として現れた闇がアークセイバーを斬り倒す。四肢が胴より離れて倒れ伏すアークセイバー。四肢はその闇の中に引き込まれて、同化した。

「おいしく頂きましたよ、コウガ」

立っているのは全身黒い、まさに鬼のような存在。口は開き、涎を垂らしている。ところどころにあるチューブから、その存在が機械であると認識できる。しかし、口は生物のように動いているし、呼吸をしているように胸が上下し腹が動いている。

「厄介ね」

「そうだね」

「コウガ、無事か？」

「俺は、な」

アークセイバーはもはや立てない。四肢はなく、機体のいたるところが欠損しているのだから。

「次は、誰の機体をいただきますよね？」

ヒクヒク動く、ガリユネスの口。にやりと笑うように顔が動き、跳ねあがる悪鬼。

それはカイザリオンに向かう。庇うようにエクシオンが現れて翼でカイザリオンを包み込む。それを薙ぎ払おうとするガリユネスに向かう巨大なアンカー。その後ろよりジャッジクロスが現れて蹴りつけてくる。

「無駄、です」

両腕で二機を弾き飛ばす。圧倒的な力の差、であった。

「・・・気と同化しているから、か」

コウガが呟く。だが、アークセイバーは、もう・・・。

「・・・仕方ない」

突如、燃え上がるアークセイバーに、驚く廻。

「コウガ、何を！？」

「今からアークセイバーと、俺の気をカイザリオンと融合させる」
「どういうことだ？」

「ま、簡単に言えば合体だ。だけど、時間がない。説明はなし、だ。いくぞ、廻！ビビんなよっ！」

炎と化したアークセイバーが不死鳥のように舞い上がり、カイザリオンに入り込む。炎に包み込まれるカイザリオン。

「まさか、自分を同化させるとは…そうまでして、私に勝ちたいのですか、コウガ・・・？」

嗤うサイガ。

「最高です。蹂躪して、捌り殺して、その願望すら打ち砕いて上げます・・・！」

動けない二機を後目にカイザリオンに向かうガリユネス。

「撃、彩、宋、閃」

繰り出される四度の攻撃。それは炎によって阻まれる。

「何っ?!」

『喰らうかよ!』

四度の攻撃がそのままガリユネスを襲う。

『待たせたな、サイガ。行くぜ!廻。カイザリオン・クロスタードの力を見せてやろうぜ!』

赤い髪を携えた、武者のような魔人が炎より現れる。

「コウガ、いくぞ」

『おう!』

左の腰にある鞘より刀を抜く。光を放つ刃を両手で構える。

『奥儀!』

「炎閃!!」

振るわれた刀より走る七つの風。気を纏い、エネルギー体となって黒い鬼に刻み込まれていく。

「な、に!?!」

『まだだぜ!』

接近し、刀を振るう。ガリユネスの右手を切り裂き、左手を切断する。

『うらうらうらうら!』

「調子に、乗るな…!!」

憤怒のサイガ。しかし、止まることのないコウガの攻撃。それはどんどんガリユネスの装甲を斬り刻む。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

遂にガリユネスの胸を貫く。迸るスパークと気。ガリユネスの胸部より血のようなものが噴き出す。

「お、お、お、お、お、お、お、お、お、お……」

貫かれた胸部。そこに倒れこんでいるサイガ。右腕はなく、全身血だらけであった。

「ば、か、な……」

『やっと、あんたを倒せる……！』

止めとばかりに刀を振り下ろさんとする炎の魔人。

『それは、困ります』

響く女性の声。

『その方にはまだ、死なれては困りますので』

「……！この声」

ミライが呟く。

『お久しぶりね、ミライ』

「……リア……」

現れたのは、女性のシルエットをした小柄なロボット。

「……」

水色の髪少女がそれに乗っていた。

焰（ほむら）の魔人（後書き）

ジャツジクロス・・・全長12メートル。全身が真っ白で特徴が何もない。人工筋肉の使用により、人間に近い運動性を獲得している。ベルナールの機体だが、入手経路は不明。武器はマッシュヴァンカー、次転式ギロチン、直上式ギロチン、ロシアンルーレット、パイル・オブ・パニッシュ等。

乱入者

「久しぶりね、ミライ」

「リア・・・」

愕然とするミライ。小型のロボットの横をすり抜ける影。それはサイガの機体を掴み、次元の中に去った。

『待ちやがれ!』

コウガの叫び声と共に走り出すカイザリオン。その前に現れるもう一つの影。

「刻の皇帝、鎧神慨装カイザリオン・・・貰い受けるぜっ!」

灰色の岩を思わせる巨人。ロボットとは言い難く、神秘的な何かを感じる。顔には見知らぬ文字の書かれた布が覆われ、二本の角が真っすぐ立っていた。

「リアっ! こいつとまっ白ヤローは俺がやる」

「そう、わかったわ、オクタヴィアヌス」

灰色の巨人がカイザリオンの前に立ちふさがる。

「オクタヴィアヌスって・・・」

廻が何か言いたそうな顔をする。

「僕も、同じことを考えていると思うよ」

ベルナルが言う。

「そちらはもしや、ローマ帝国皇帝アウグストスか?」

白い機体を巨人の前に向け、ベルナルが聞く。

「いかにも! 俺こそローマの皇帝にして、アウグストスと呼ばれた男だ!」

オクタヴィアヌスが言う。

「何故ここに居るかはこの際置いておこう。俺の目的はただ一つ。その鎧神慨装を我がローマのために持ち帰ること!」

「めっちゃくちゃな・・・」

呆れた廻の声。どこからか剣を取りだし、構える巨人。

「皇帝器ユグガサの剣に勝てるかな？少年」

『ほざいてろ！廻、やるぞ！』

「ああ！」

刀を構えるカイザリオン。ベルナールの機体もアンカーを構える。

「ローマの覇王をなめるな！」

「一族が減びてもまだ、使命を果たそうとしているのかしら？」

「一族を捨て、ヴァーウルに加担した者に言われることではない！」
怒れるミライ。余裕の表情のリア。

「いい子ぶって、昔っから気に入らないのよねー」

「・・・」

「ま、いいわ。相手してあげるわ」

小型のロボットがエクシオンの前に降りる。

「クレオンの前に、塵となるがいい」

「私は、負けない」

エクシオンが翼を広げ、クレオンに向かって飛び出す。

「天征亮・華月夜！」

エクシオンの影より伸びる無数の刃がクレオンを襲う。レイピアを取りだし構えるエクシオン。

「天征亮・舞輪廻」

光り出すレイピアを振り、真空波がクレオンに向かう。無数の刃が貫き、クレオンを束縛し、真空波がその小さな機体を斬る。しかし、すぐにクレオンの機影が消える。

「！！幻？」

「そう」

後ろから突き出る刃。腹部より剣を生やすエクシオン。

「型どおりすぎるのよ、あなた」

剣を振り払い、地上に降りるクレオン。崩れ落ちるエクシオン。
「終わりね」

「うらーーーーーあああああああ!!!」
「くう!」

押されるカイザリオン。ジャツジクロスの援護攻撃もユグガサはいともたやすく回避する。

「これが鎧神慨装の力? 笑っちゃまうぜ!」

飛び上がり距離を置くユグガサ。カイザリオンとジャツジクロスはぼろぼろであり、立つのがやっとであった。

「んじゃ、そろそろキメるぞおー! アントニウスやコルメキアの魔女、ドラグーンを葬った技だ! 光栄に思え!」

剣を大地に突き立てる。地に走る亀裂。雲が空を覆い、雷が鳴り響く。

『気が、一点に集中している・・・!』

「次元も、集束している?」

廻も、コウガも驚いている。ベルナールが苦虫をつぶしたような顔をしていた。

剣の刺さる場所より魔法陣が浮かぶ。

「リア!!! 特大の行くから回避しろよー!」

「なっ! ちよ、ちよっと・・・」

慌てるリアの声。

「ラ・ヴェテル・エル・マゼル・ディフェンディク・・・!!
ン・ソ・レグド・・・!! 最終奏、黄昏の刻よ、世界の終末よ
!!! ラグナレク・・・!!!!」

世界に光が満ちる。逃げ場などない。ただ、絶望が心に過る。

転

死を予感し、二な目をつむった。ただ一人廻のみがそれに足搔く。
(兄貴・・・ナツキ・・・っ!!)

手を伸ばせば、届く。世界はこんなにも近いのだから。感覚的に糸を手繰り寄せ掴む。ただそれだけ。エクシオンとジャッククロスを
‘ 掴む ’。

(行ける!)

光が満ちる前にカイザリオンと二体はその世界より離脱する。

コウガ、ミライ、ベルナールが一斉に目を開けると、そこは高校だった。あの戦いの影などない、平和な世界。生きていることはわかる。どうやって生き延びたのかは、わからない。

「・・・廻?」

そこには、廻だけがいなかった。どこを探してもいない。次元世界、世界各地を思い当たる場所は全て探した。だが、見つからなかった。
夜剣廻の失踪。

「どこにいる、廻・・・!」

二人の息子に居なくなられた夜剣夫妻は日に日に痩せこけていった。その顔に望みはない。

だが、ナツキ・エリクセンは信じていた。ただ、廻の帰還を。そんなナツキを不憫そうに見る面々。

「こうしてはいられない。奴らを、この世界を奴らから、守らないと・・・!」

悔しげなコウガの声。

「カイザリオンは残っている。今は廻なしで戦うしかない・・・」
操者なきカイザリオン。どこか、寂しげに見える。

「私がカイザリオンに乗るわ。うまく使えるかは分からないけど」

ミライが言う。地震はなさげである。

「エクシオンは？」

「・・・本来の持ち主に・・・渡すわ」

そう言っただけに意味深な瞳を送るミライ。その瞳の中の感情を読み取るのはできない。ベルナルも、コウガも。

こうして、一学期は過ぎていく。廻のいない世界。しかし、それでも、時は過ぎていく。残酷なまでに。そうして風化する夜剣廻の記憶。ただ少しの人間たちの中に、彼がいた、という記憶が残るのみ。

廻のいない世界を眺める夜剣奏。そして、サイガ・レイテ―。

「これからどうする？」

「お前は治療に専念しろ。俺は廻を探す」

「・・・奴がいなければ、次元の統一は不可、か」

「そうだ」

「・・・あの二人は？」

「リアはあの方のもとに居るが、もう一人は知らん。リアも、な」

「・・・そうか」

「傷が治るのは、当分先だな」

「それまでに、奴がどれだけ強くなっているかな？」

「一度負けているだろうに・・・」

「あれは鎧神慨装に負けただけ。コウガが勝ったわけではない」

「ふん・・・」

次元の歪みが開く。

「何処に行く？」

「奴を、探す」

「何故？」

「悲願の成就のために」

転

目が覚めると、廻がそこに居るような気がした。手を伸ばし、掴もうとするが、そこに彼ははいない。ナツキ・エリクセンは失望感を胸に起き上がる。大学に出るのはもう少し先だが、早く起きたかった。

夜剣廻の失踪より2年の歳月がたっていた。

2年で変わったことは多かった。夜剣夫妻は苦労がたたり二人とも亡くなった。ナツキはかねてより希望していた大学に通うため、地元を離れて一人暮らしをしていた。コウガやミライもまた、同じ大学へと通っている。夜剣廻は依然、姿を見せない。

2年の歳月。ずっと待ち続けているナツキ。もはや彼の存在そのものがないかのように他の人々の記憶は風化している。

(何故、こうなったんだろう)

自分は廻の失踪の真相をベルナルから聞いた。驚いた、と同時に起こった、廻に。私に何故、話してくれなかったの、と。でも、すぐに分かった。

(私を、巻き込みたくなかったんだ)

昔からそうだった。一人で抱え込んで、私を守ろうとする、不器用な彼。今でもありありとその姿を思い出す。

色々な事情があったことを知った。そして、私自身もそれに巻き込まれていく。エクシオンという機体。それは今では私の愛機だ。ミライは私にこれを託した。戦うも、戦わないも自由だ、と言われた。でも、私は逃げたくなかった。廻が守ろうとした、日常を守るために。それが正しいことかは分からない。

(それでも・・・)

大学は楽しい。友人もいるし、学びたいことを多く吸収できる。
だが、そこに彼は何とも言えない感情を持つ。

（これが僕の求めていることなのか？）

虚無が少年の心にはあった。何者にも知られない、だが彼のみが知る虚無感。

（・・・・・・）

ふと眼を上げると、一人の女性がいた。同じ大学の学生だ。サイドテールの、憂いを秘めた女性。いつも悲しげな瞳をしていた。彼はそれを見ると、何とも言えない感情が込みあがってきた。

（彼女は、いいな・・・）

指がワナワナと震える。彼は己の虚無感を埋めるために彼女をどうするかと言うと。

（殺したいほどに・・・！！）

だが、今は駄目だ。もう少し様子を見てからだ。と、そう考えていた青年に声をかける一人の人物。

「その感情、使えるな・・・」

「!？」

青年が振り向く。そこに居るのは全身黒い男だった。

「汝の願いをかなえてやる、と言ったらどうするかね？」

青年は何か、とてつもない力を感じ、恐怖した。だが、本能は引かれていた。この男の言葉に。

青年はうなづいた。そこで初めて、男の顔に感情が浮かぶ。

「奴をおびき出すためのえさとなってもらう。ナツキ・エリクセン」

ベルナールは倒れ伏していた。病魔に侵され、一日中ベッドの上。知ったのは数か月前。肉体の崩壊が始まっているのだ。

（・・・長くはない、か）

作られた存在。故に寿命も短い。彼はどうせ早く死ぬだろう、と思

って延命処理はしてこなかった。それが自然の摂理だと、思ったからだ。

（この命が尽きる前に、見たいものだ）
螺旋の終わる、その刻を。

「なあ、夜剣廻」

君は今、どこに居るんだい？二人のヤツルギカイにそう言うベルナル。その声は届かない。ゆっくりと目を閉じる。まだ、死にはしない。だから、目を閉じよう。そう、まだ、死ねない。

異世界のふたり

ある丘に一人の人物が立っている。少年は青年へと変わった。その背丈は随分と伸び、片目は伸びた前髪に隠れている。雰囲気も全てが変わっていた。

「よう、見つけたか？ 戻る方法」

青年の反対側から歩いてきた金髪の男。

「いや、オクタヴィアヌス。だが、手掛かりは見つけた」

金髪の男は笑ってガシガシと青年の頭をかきまわす。鬱陶しがる青年。

「やめろ」

「昔はあんなに小さかったのに、今じゃもう…」

「俺とお前とは二歳しか変わらないだろ。子供扱いをするな」
そう言って手を払う。

「ま、この二年色々あったな」

「全く、な」

少し笑う青年。丘に射す夕日。

「ここにも、ずいぶん慣れちゃった」

「仕方がないな」

「ああ」

二人は夕日を見る。

「そういや、手掛かりって？」

「・・・ユグガサを、見たものがあるらしい」

「ほおう・・・」

金髪の男が目を細める。

「どっちだ？」

「南だ」

「行くかね、ほんじゃ」

「ああ」

二人のいる世界。それは文明が荒廃し、自然が生い茂る世界。見渡す限り森。人間に似た種族がこの世界には多くいる。彼らの名をエルムと言った。二人はエルムより、「転移者」と呼ばれ、神聖視されてきた。この世界に巣くう、悪を倒す存在として。

その悪が興味深かった。伝承で語られるその姿、絵に描かれたその姿。いずれもが、鎧神慨装であった。

「全てはここから、始まったのかもしれないな」

続く螺旋。それを終わらせる手掛かりも、ここにはあるかもしれない。

青年たちは南に向かう。その顔には希望があった。

転

大学からの帰宅途中、ナツキはある人物に話しかけられた。レドナ・プリスコ。どこの留学生かは忘れたが、同じ大学に通う男子だ。「何の用でしょう？」

少し笑みを浮かべ聞くナツキ。笑いだすレドナ・プリスコ。

「いえ、少し、お相手を」

「……なんの？」

警戒するナツキ。顔をゆがめるレドナ。

「ちょっとした舞踏会の、ですよ!!」

その瞬間、街が爆発する。轟音を上げる街の中を、一人の男は笑って立っている。その背後に現れる機械の化け物たち。

「こんな、街中で……!許さない!」

「ほう、どうすると？」

「来なさい、エクシオン!」

はるか上空より飛来する戦の女神。その衝撃波で周囲の機械を蹴散らす。

「いいですよ、フッフ……」

レドナはまだ嗤う。

「じゃあ、僕も行きますよ。アイケンアイザー!!」

大地が膨れ上がり、そこから這い出てくる機械。

「行きますよ、アイケンアイザー!」

「させるものか!」

降り注ぐ閃光。

「ギャザッシュシャワー!」

再び降り注ぐ閃光が機械を駆逐する。

「ミライ!」

「……待たせたわね」

「俺も居るぜ！」

ミライ、コウガがカイザリオン、アークセイバーを駆ってきたのだ。状況は三対一。しかし、レドナのアイケンアイザーは後退する気配を見せない。

「まだ、これからですよ、ショーは・・・！」

不格好なアイケンアイザーはその身体で突進してくる。エクシオンが回避する。そして、アークセイバーの攻撃がアイケンアイザーを襲った。

「うほああ?！」

レドナは驚いた声を上げる。アイケンアイザーは倒れこむ。

「何故、僕が・・・」

「諦めなさい」

ミライが呟く。

「いやだ、いやだあ、い、や、だーーーーー!!!!!!」

立ち上がり、咆哮するアイケンアイザー。膨れ上がるその機体。

「何が起きてるんだ・・・?」

「進化、している・・・」

ミライ、コウガが呟く。

「僕は、負けないよお・・・」

二倍に膨れ上がった巨体を揺らすアイケンアイザー。

「これで、皆死ぬよお」

集束する光が三機を捕らえる。

「そうは、させん」

乱入する影。

「誰だ?!」

「・・・答える義理はない！」

黒い、ジャッククロスがそこに居た。黒いそれは背に携えた何十もの刀剣を空に投げる。剣がアイケンアイザーを囲むように突き刺さる。

「剣示結界！」

光の刀が地より突き出て、アイケンアイザーを貫き、押さえる。

「全てを、斬る・・・黒竜刀、白竜刀！！」

ふた振りの刀を振りかざして切り裂く。アイケンアイザーの血が降り注ぐ。

「うぎゃあああああああああ！！だ、脱出する！！」

爆発する巨体。肉片が空を舞う。

「切り捨て御免・・・」

そう言って消え去る黒いジャッジクロス。

「いったい・・・？」

三人は何があったのかを解せないでいた。

黒いジャッジクロス。それはベルナルのもとを訪れていた。

「・・・お前、か」

「久しぶりだな、ベルナル」

ずかずかと、部屋に入り込み、近くの椅子に座る。

「・・・あれが今の戦力、か」

「すくない、だろう」

「夜剣廻は？」

「・・・」

肩をすくめるベルナル。

「どこにいるのか、ね」

「・・・」

「おい」

「ん」

「肉体はあと、どのぐらいだ？」

「わからない。けど、長くはないね」

「そうか。・・・なあ、親父」

「うれしいね。こんな僕を父と呼んでくれるのかい？」

「・・・」

「フフフ・・・やさしいね、顔に似合わない」

「・・・親父」

「ありがとう、でも、心配はいらないよ。だから、彼らを、頼む」
「承知、した」

「少し、疲れたな。悪いけど、眠らせてもらおうよ。お休み、カイン」
「ああ・・・いい夢を・・・」

謎

あの日の爆発事件はテロであった、というのがもっぱらであった。異次元より来た謎の存在には触れられていない。

(・・・この世界はおかしい)

ナツキはそう思う。世界の修正力。次元を渡る鍵、カイザリオン。鎧神慨装のみが次元を渡れる。それにもかかわらず、何故こんなにも侵入者がいるのか。ベルナル、ミライ、コウガ。いずれもどのように来たのかは知らない。だが、何かがおかしい。それだけわかる。

(どういふことなのかな、廻・・・)

己の乗るエクシオン。それも不可解な存在である。ミライはこう言っていた。

(あなたの乗るべき機体を、返すわ)

彼女は預かり物を返すかのように言っていた。

(別の次元、別の世界の私が使っていた?)

そう思えば、納得ができる。しかし。

(わからない・・・)

ふと、窓の外を見る。街は半分近く焼失し、人影も少ない。日本、とは思えない。誰もが考えていなかっただろう。このような世界。

(会いたいよ、廻・・・)

力強く己を抱き締めるナツキ。

二人は歩いていた。ユグガサ。皇帝器とも呼ばれし、古代ローマの遺産。ユリウス・カエサルにより発見され、オクタヴィアヌスにより使用された。その存在は未知の塊であり、オクタヴィアヌスも知らないことばかりであった。この世界に二人が来た時、ユグガサは自我をもったように走り去った。この世界を壊し、何かを求める

ユグガサ。この世界には何があるのか？

「・・・ユグガサを見つけても、どうするか、だな」

廻が言う。頷くオクタヴィアヌス。

「この世界には機動兵器なんてないしな。文明が滅びた世界、だからな」

「・・・なあ、オクタヴィアヌス」

「あん？」

「俺はこう考えているんだ。ユグガサは恐らく、鎧神慨装だと」

「そんなわけないぜ、廻。あれにそんな力なんて・・・」

「そもそも、あれは誰が作ったのかわからない。一見してみても、似ているんだよ、その外見が。二つは何か関係している。いや、他の鎧神慨装とも、な」

「一体しかないはずの鎧神慨装・・・お前の説が正しけりゃ何機もウジャウジャシテいるってことだよな」

「・・・始まりはどこなのか、この螺旋の始まりは」

数日後、廻たちはある一つの遺跡を見つける。それは彼らの世界にあったとある街に似ていた。

「三上崎市・・・！！」

「こりゃ、いったい？」

錆ついている、風化している箇所もあるが間違いがない。ここは彼の故郷なのだ。

「やはり、関係していたな。ここは、未来の地球、ということだ」

「時間がどうなっているのか、さっぱりだな」

「だが、これも手掛かりだな。さて、どうするか・・・」

周囲を見渡す。遺跡には何者も居なかった。

『ほう、客が来るのは何年ぶりかな・・・』

響き渡る声。

「何者だ」

廻が聞く。声は笑って言った。

『我が名は夜剣の民の監視者、ムブフ……。そなたたちは？』

「ローマの皇帝アウグストス」

「夜剣廻」

『!!』

声が驚きを発する。

『よもや、こうして夜剣の民と会おうとは……。!』

「夜剣の民？」

『いやはや、我以外は死したものだと思っておった……。』

「……。詳しく教えてもらおう必要があるな」

皇帝器伝

ガリア遠征には、カエサルはガリアの征服のほかにも、成し遂げたいことがあった。それは書物にある「刻の器」もしくは「皇帝器」と呼ばれる、巨神の発見である。

カエサルも、最近になってそれを知った。東方遠征をし、若くして死んだアレキサンダー大王。彼が探し求めた秘宝。それが書物の伝承にある巨神である。彼はその正確な位置を知らなかったし、まず彼はペルシアとの戦いがあった。その後も東方へと足を延ばしたのだから、ガリアの地に足を踏み入れることはなかった。カエサル自身、偶然見つけたその書物。それには、ガリアの地に眠る、と記されていた。

「皇帝器、ユグガサ。それを得たものは、全てを手に入れるであろう。時も、世界も、次元すらも・・・か」

美丈夫カエサルが馬に跨り、呟く。何万の軍勢を率い、ガリアの蛮族を制圧したが、皇帝器を探す時間はなかった。カエサルはローマに帰っていく。

カエサルが再び、ガリアの地に来たのは、第一次三頭政治初期の頃である。約一カ月にもわたる期間を彼は兵士と共に皇帝器を探していた。ローマを守る盾。それをカエサルは求めていた。いずれ、ローマもまた滅びの道をたどる。それが人の世の摂理である。それを知らないカエサルではない。故に、世界すら手に入る、という皇帝器に賭けてみたい、と思ったのだ。

そして、天はそのカエサルに皇帝器を与えたのだった。

失意のまま、帰ろうとするカエサルのもとに、一人の兵士がやってくる。

「見つけました！ 皇帝器を」

「何、どこにあるのか？」

「こちらです」

向かう先は森の奥深く、霧の深い魔の地。原住民でさえ、立ち寄らぬ底にカエサルは踏み込んだ。まるでそこは神話の世界であった。カエサルはこんな森のどこに皇帝器があるのかと、兵士を問いただした。だが、兵士の姿はなかった。今さっきまでそこにいたはずなのに。

「ええい、ままよ」

そう言い、歩を進めるカエサル。

そのうちに遺跡へと周囲の景色は変わっていた。それでも、歩みを止めることなく、ただ奥に進むカエサル。地下へと続く階段を降りながら、カエサルは思う。

（優れた文明の跡。一体かつてこの地はどんな種族が栄えていたと
いうのだ？）

未知への興奮で彼の体は震えていた。彼は恐れを抱くと同時に喜びに震えあがっていた。地下へと続く道を松明で照らす。辺りには見たことのない絵や文様が書かれている。

「……素晴らしい」

遂に奥へとたどり着く。上を見ると、逆ピラミッドがある。地上から、何時間歩いたことだろう。だが、そんなことは関係ない。疲労さえ感じない。ただ目の前の灰色の巨神のみをカエサルは見ている。石造のような、だが、何かが違う。その姿はまるで神のようであった。

「なるほど、皇帝器、か……！」

笑みを浮かべるカエサル。これほどのものとは、思わなかった。

（これさえあれば、ローマ、いや、世界さえも手に入れられるであろう）

「皇帝器、ユグガサよ！我が名はユリウス・カエサル！！世界の王となるべき男だ！我にその力を貸し、共に世界を手に入れようぞ！
！」

そのカエサルの叫びを聞きいれたかのようにそれは動き出す。そして、その腹部が開き、カエサルを招き入れる。

「ふふふふふ、はっはっはっはっは、はーはっはっはっはっは
ああ！！！」

狂ったように笑うカエサルの声が響いた。

カエサルはこの後、ユグガサによって政敵を倒し、ローマの独裁者となった。圧倒的なその力で周辺部族を取り込んでいった。

しかし、彼は暗殺されてしまう。独裁者の力を危惧する者たちによって。彼らはカエサルの持つ、ユグガサも手に入れようとするが、既にそれはなかった。カエサルの甥、オクタヴィアヌスは、カエサルの死んだ後にはユグガサを託す、という旨の手紙を受け取っていた。彼はそれに従い、皇帝器を駆ってローマを飛び出した。

それが彼の運命を大きく変えることとなる。

試験管の世界

その声はおもむろに語りだした。

『それは遙か昔、そう、世界も次元もまだ存在しなかった無の時代、それがビッグバンによって終わった時、全てが生まれた。数多の世界、広がる宇宙、多種多様な生命、星たちは無数に生まれては消えていった。』

そのうちに、空間にほころびが生まれて、そこから一体の魔人が出てきた。石のようなそれはこの宇宙の創造主すら、知らぬ未知の存在であった。それを創造主はユグガサと呼んだ。未知を意味する、神の言葉だ。

創造主は衝撃を受けた。故に、彼はあるものを作った。それに似せた、だが、それ以上の力を持つ、神ともいえる存在、己すらも凌駕する魔神を』

「それが、鎧神慨装か」

確認するように聞く廻に、肯定する声。

『然り。そうして、七機の鎧神慨装が作られた。それと同時に、それを守護し、次元空間のほころびを管理・修正する種族が生み出された。それが我ら、夜剣の民だ。』

長きにわたり、我らは時間を超え、世界を超え、この世界を、宇宙を守ってきた。創造主がこの宇宙を去った後も。しかし、そんな我らの中にも、一人の野心をもった若者が現れた。

その名をヴァーウルと言った。賢いものであり、一族の時期長となる男であった。しかし、奴は鎧神慨装の一つを奪い、残りの機体を破壊もしくは隠匿した。我らに残されたのはカイザリオンただ一機となってしまった。

一族の長の娘、トウカは異なる世界の地球にて連れ添った男とともに、一族郎党を引き連れてヴァーウルと戦った。ヴァーウルに着き従う数名の者たちと彼らの作った疑似鎧神慨装、そのなれの果て

により、我らの数は激減した。我らもまた、鎧神慨装のデータより生み出した疑似鎧神慨装を使ったが、どうすることもできなかった。ヴァーウルは遙かな次元に逃げ伸び、我らは散り散りになり、次元世界の守護とヴァーウルの足跡の発見を使命としている。以来私はここに居る』

「それで、俺が夜剣の民、というのは？」

『その瞳、その漆黒の髪。そして、その魂の波動。それはまさしく我らと同一のものよ。汝らがここに来たことにも定めがあるのだろう。おそらく、ここに汝らを送ったのであろう、鎧神慨装カイザリオンが』

「ただの機械がか？」

『わかってはいるはずだ、あれが人智を超えた存在だと。ひとつ、教えておこう。この先にある祭壇、そこにユグガサはおる。ただ黙しているだけだが、真実を知りたいのなら行くがよい。さらばだ、同朋よ。汝らに光あれ』

声はそうして止んだ。二人の足は遺跡の奥へと向かう。廻の記憶には祭壇など、三上崎にはなかった。

「確かめるだけ、だ」

そう、全てはそれからなのだ。

歩いて行くと、街の中心部は挟れていてクレーターとなっていた。その中心にある、巨大な球体。ユグガサでも入っていけるだけの高さの穴が開いていた。

「ここか」

廻が言った。

「んじゃま、行くか」

二人は奥へと進んでいく。内部は暗いが、ところどころにある明りによって照らされて、文様が見えた。

「こいつは、俺が昔に見たものと同じ文字だな」

オクタヴィアヌスが言った。

「まったく、どうして世界にはこうも謎ってのがあるのかね」

「さあな」

立ち止まる二人。その眼前に広がるのは青空であった。風景はガラッと変わり、外に居るように錯覚する。

「何だ、ここは・・・？」

「さあ・・・？」

草は茂り、鳥や虫が舞っている。無限に広がる広野。そこには二人だけが立っていた。

空が曇った。と思うと、その頭上にはユグガサがいた。空中に呆然と立っている巨人。

『・・・・・・・・・・』

声、を発したユグガサ。しかし、二人にその言葉は伝わらない。地に降り立つユグガサ。岩のような体にはひびが入っていた。

「あの身体に、傷が入っている・・・ありえない」

オクタヴィアヌスが言った。さも、信じられないようである。ユグガサの体からはぽろぽろと破片が落ちる。

「・・・・・・・・」

黙ってそれを見ている廻。

『選べ、操者よ』

突然、二人の頭の中に響く声に驚く。二人は眼前に立つ巨人を見上げた。

『何を望む？』

「一体・・・？」

『刻は満ちた。世界は再び一つとなる』

「お前はいったい何者だ！！」

廻が叫ぶ。眼前の巨人の腕が空へと伸びる。

『この世界、宇宙の真の創造者だ。この、試験管の世界の、な』

「試験管の、世界・・・？」

『全ては我らの計画通りであった。今こそ、その計画の最終局面だ。さあ、選べ、操者よ。この世界の運命を』

試験管の世界

「計画？」

廻は巨人に聞き返す。巨人の頭が大きく傾く。

『そう、我らによる数多の実験、この宇宙も次元もその一つ。ユグガサ・プロジェクトの一環だ』

「じゃあなんだ？俺らもこの世界もお前たちが創り出した、道具でしかないと？」

オクタヴィアヌスが眉間にしわを寄せて言う。

『そうだ、我々が心理へと至るための・・・』

「はっ！神様のつもりか？」

『そう、私はこれから神に至るのだ。ほかならぬ、お前たちの手によつてな』

「意味が、わからないな」

「まったくだ」

そこで、ユグガサが嗤う。

『この世界も、そして他の計画で作られた世界も、たんに我らの世界を映したにすぎない。虚影の世界。鏡の世界。貴様らの存在は妄想に過ぎない。そのようなものたちに、神が説明してやる必要などない。モルモットはモルモットらしくするがいい』

「気に入らねえな。じゃあ、ヴァーウルやらなんやらは一体何なんだ？」

『我らの計画の一部。実験をより極めるための材料。無限に存在する夜剣廻たちもまたそうだ。面白いことに、運命づけられたプログラムに逆らえる夜剣廻もいれば、そうでもないものもいた。私はこれを解明したかった。結果は常に完全でなければならない。不完全な研究などに意味はないからな』

「それで、何が分かったと言うんだ？」

『夜剣廻。それは当初はただのバグに過ぎないと思っていた。だが、

私はあることに気が付いた。我らの施したプログラムがある一個体から狂い始めていたのだ。何十億、いや、それ以上の確率で発生するバグ。それによって生まれた個体は徐々に性質を変化させ、遂に究極の個体を作りだした。それが、お前、ということだ』

「……」

『まさしく神だ。そう、我らの目指す最終地点。その完成点がお前だ。故に、この世界での最後のテストだ。お前の望む世界、それを創造させてやろう。そうすることで、我らの悲願は成就する……』

「ふん、意味がわからないな。狂人のたわごとだな」

廻はそう言った。オクタヴィアヌスもまた、同意見のようであった。
「創造主だろうが、なんだろうが気に入らねえ」

『愚かな……』

ユグガサが手を掲げる。

『自ら、滅びを望むか……だが、いい。結果は手に入った。これで私は神に近づく』

ユグガサを覆っていた岩肌が一気にはがれおちる。そこから出てきたのは白い魔人。

『真の神の力を手に入れよう。全てを支配しよう……』

「……安っぽい悪役のセリフだな」

「まったくだぜ」

『機体も力もない貴様らに勝ち目など、ない』

「はっ！上等！武器がなしに戦争はできないってえ？なめんなよ、このアウグストスを、俺たちをなあ！」

「……」

『……！この反応は……！？』

突如次元が分かれていく。天より二つの機体が下りてくる。

「いったい……！？」

『廻、運命を、切り開け』

「誰だ？」

『創造主に抗うもの、さ。君が真実を知り、それでも明日を知りた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3853j/>

鎧神慨装 カイザリオンRe

2010年10月10日07時24分発行